向日葵と魔方陣

楽山やくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
向日葵と魔方陣

【Ｎコード】
Ｎ７９０８Ｎ

【作者名】
楽山やくら

【あらすじ】
向日葵を片手に、少女はゆく。飛べなくなった少年を、空へと還すために――。人の背に本心を見るちょっと変わった少女と、自分の気持ちに不器用な少年の、ある冬の話。

【序】

開け放たれた窓から、冷たく乾燥した風が吹きこんでくる。白いカーテンは手招くように揺れ、その部屋を訪れたわたしの視線を一瞬にして奪っていった。

「――きみは……？」

声をかけられてからやっと、顔の向きを変える。にっこりと笑いかけたら、ベッドの上のその人は戸惑ったように首を傾げた。

「背中にね、人の本心が見えるんだよ」

口に出しながら、一歩ずつ近づいてゆく。

「え？」

「だからわたしは、この向日葵を持っているの」

そう、手もとにある一本の向日葵を、くるくるとまわしながら。

「だから、わたしは――」

語りはじめる。

『彼ら』の物語を。

【1】

まっ白なゲレンデには、わたしの長い黒髪が映える。そう言い張っても、きっと誰も否定しないだろう。

現に今、雪の上をてくてくと歩いているあいだに、何人もの人がわたしを振り返り、丸くした目を向けてきた。

――うん、本当は知ってる。

彼らはわたしの美しい髪に驚いているのではなくて、わたしがセーラー服姿だから驚いているんだと。そして、そのセーラー服の上になにも着ていないから、驚いているんだ。

正直、わたしだって寒い。

とても寒い。

一月も下旬にさしかかっているこの時期に、どうしてセーラー服一丁で外を、ましてや白銀のゲレンデを歩かなければならないのか。コートを着てはいけないのか。わたしは露出狂なのか。

考えはじめるときりがないけれど、しかし結局のところ、それを選んでいるのは他ならぬわたし自身だった。

――だって、セーラー服はわたしのユニホームだもの。

しかも、『学校の』ではなくて、『人生の』ユニホーム。わたしが荒波と戦うための服。だから、着ていることを隠すわけにはいかなかった。自分でもなにを言っているのか、よくわからないけどね。

それでもって、セーラー服と同じくらい大事なのが、手もとの向日葵だ。うん、すごく季節外れだということは、当然わかっている。一本だけ手に持っていたら、そりゃあもう目立って仕方がない。しかもこの向日葵は、ちゃんと咲いているんだから。

長く美しい黒髪と。

露出したセーラー服と。

咲いた向日葵と。

雪の降りつもったゲレンデでは、あまりにも人目を惹いてしまう

わたしだけど、わざわざやってきたのには、当然理由があるわけだ。
ざくざくと歩いていた足をとめ、わたしは目指す先をを見あげる。雪の照り返しがまぶしくて、手で影をつくりながら捉えたのは、山の中腹につくられたジャンプ台。スキーを履いたままジャンプするという、恐ろしい競技をするための台だった。
――早く行かなくちゃ。
すでに飛んでいる高校生たちの姿が見えて、わたしは少し焦る。これまでよりも速い足取りで、再び歩き出した。
そう、わたしはここで練習をしている選手に会いにきたのだ。
もっとも、急ぎたいのはその選手が飛ぶところを見たいからではない。
なぜなら――その選手は『飛ばない』からだ。

＊

ジャンプ台の裏手に着いた頃には、わたしの息はすっかり切れていた。
――やっぱり、無茶だったわね。
いくらリフトに乗ると目立つからといって、歩いてのぼってきたのは失敗だったかもしれない。
けれどさいわいにして、わたしが見たかったものはちゃんと見ることができた。
スタートバーに腰かけている、高校生男子にしてはやや華奢な背中。
（ここにいるのは、好きなのにな……）
それを視界に入れた瞬間、わたしのなかに流れこんでくるのは、彼の『心』だ。本当は誰も気づかないはずの、誰にも明かされないはずの心を、わたしはこうして垣間見ることができた。
（風はすんげぇ気持ちいいし、銀蝶山のジャンプ台なら海まで見えちまうしな）

これからジャンプしようというときに、彼はずっと遠くを見やって、ぐだぐだと考えごとをしている。
（白銀の先の、あの海まで思いきり飛びこんでいったら、こんな俺でもやさしく包みこんでくれるのかな――）
聞いているうちに、わたしもその景色を見てみたくなって、思わず視線を彼の背中から離した。
そのときだった。
「おいっ、時枝（ときえだ）！　滑る気がねぇならさっさとよけろや。後ろ詰まってんだよっ」
遠くから誰かが、強い口調で彼に告げた。どうやら部の先輩らしかった。
（――ふん、うるせえな）
心のなかで文句を言いながらも彼は、おかげで現実へと戻ってこれたらしい。ぶるぶると頭を振ってから、もう一度辺りを見まわしている。
そして目をとめたのは、自分の前に伸びている急斜面。
（初めてこの場所に立ったときには、こんなところを滑りおりていくなんて正気の沙汰じゃないと思っていたのにな）
そう考える彼は、意外にも落ちついているようだった。そこを滑りおりていくことに、慣れてしまっているからだろう。
（むしろもっと、際どいほうがいい）
もっとスピードをつけたいのだと。
力を蓄えて、もっと前に高く飛びたいのだと、強い気持ちが伝わってくる。
――そろそろ飛ぼうとするかしら？
彼の背中にそんな気配を感じて、わたしは覚悟をつくった。
案の定彼は、スタートバーにつけているお尻を少しずらして、滑り出すための準備を始める。
そしてとうとう、スタートバーに手をかけた。
「……くっ」

小さく呟いた彼の声が、後ろから隠れて見ていたわたしのほうまで届く。
よく見ると、彼の全身は小刻みに震えていて、とても滑り出せるような状態ではなかった。
（飛びたいのに……！）
強い想いが、わたしの心まで刺激する。
わたしがつくった覚悟は、このためだった。彼の悔しい想いが強すぎて、痛いんだ。
――また、思い出してるのね。
彼の脳裏に焼きつけられてしまった、映像。
転がり落ちてゆく、親友の姿。
それは彼の、呼吸まで不自由にしてしまう。
ただ座っているだけなのに、徐々に息をあげていく彼に、再び声がかかった。
「いい加減にしろ！　せっかく二週間後の団体戦メンバーに選ばれたっつうのに、満足に練習もせんで出る気か！？　おめえが怪我したわけじゃねぇだろうが！」
彼のかわりに飛んでいくのは、先輩の声音。
（わかってる、怪我をしたのは俺じゃない）
心のなかで、彼はそうくり返す。
（俺じゃなくて――俺の親友で、部のエースだった武志（たけし）だ）
そう、わたしが調べたところによると、それは先日行われた大会で起こった出来事だったらしい。
彼の親友である石松武志が、ジャンプ中に体勢を崩し、雪の斜面に落下したのだという。そしてそのままブレーキングトラック――つまり平らになっている下のほうまで転がっていって、かなり酷い怪我を負ったのだ。
そして彼は、それを目の前で見ていた。
（あんなの、この競技じゃ珍しくもないことなのに……）
当然過去にも、人がぐちゃぐちゃになっていくのを見たことがあ

ると、彼の心は告げている。それでも彼が耐えられないのは、やっぱりそれがよく知っている相手だから、なんだろう。
（毎日夢に見る）
彼はこんな山の上まで、その映像に追いかけられていた。
（そんなに俺が憎いのか？）
考える彼の心が、痛い。
（俺も同じ目に遭えばいいと、思っているのか――？）
そうじゃないと、思わず言い出したくなってくるほどに、わたしもつらかった。
手を握りしめすぎて、つい大切な向日葵を折ってしまいそうになってから、慌てて我に返る。
――しっかりしなよ。あなたの足は捻挫なんかしてないんだから、普通にいつもどおり飛んだら怪我なんかしないよ。
彼の心がわたしに届いても、わたしの心が彼に届くことはないのに、とっさに語りかけた。
まるでそれが届いたかのように、彼は自分の足もとを見やる。
（ゴッツ先輩の言うとおりだ。せっかく大会に出られるんだから、俺だってそれなりの結果は残したい）
再び、彼の葛藤が始まる。
飛べなくても、練習をしないわけにはいかないから。高いところが好きなんだからと、必死に言い聞かせる。
そんななか。
（息をとめて、飛んでみようか）
――！
不意に飛びこんできた感情に、わたしは焦った。
（飛べる自信がなくても）
――駄目……
（足の震えが、とまらなくても）
――そんなんじゃ、飛ぶ前から結果は決まってるの！
彼があまりにもやけくそに考えていたから、そしてそのまま腰を

あげようとしていたから、わたしは慌てて隠れていた陰から飛び出した。
声だけは冷静にと努めて、一字一句丁寧に紡ぐ。
「そんな気持ちで飛んでも、怪我をするだけだよ」
「……えっ？」
なんとか間に合って、彼は腰をあげるかわりにこちらを振り返った。顔が一瞬にして、唖然としたものに変わる。
――いいけどね、慣れてるから。
わたしは背中からじゃないと心が読めないから、今は彼の考えていることを正確に知ることはできない。けれど、目と口をぽかんと開けた彼の表情は、とてもわかりやすいものだった。
女であるわたしが、こんな格好でこんな場所にいるから、驚いているんだろう。
――逆の立場でも、驚くわ。
それは否定しない、絶対に。
考えながら、わたしは手もとの向日葵をくるりとまわした。
わたしが声をかけたのだから、なにか返してくれてもいいんじゃないかと待っているんだけど、彼はなかなか口を開かない。驚きすぎて言葉が出ないんだろうか。
「……」
「……」
結局わたしたちは、そうして数分間見つめあっていた。そんなロマンチックなものではないけれど。
すると三度（みたび）、乱暴な声がかけられる。
「おい時枝！？　おめえ、なに女連れこんでるんだよっ。コーチに見つかる前にどっか連れてけ！」
今度は今までよりも近い位置から聞こえたから、わたしも目をやった。
――ああ、なるほど。だから『ゴッツ先輩』なのね。
と、一発で納得できるほどゴツい人だった。

いきなり叱られた彼は、わたしとゴッツ先輩を交互に見やり、
「えっ？　こいつ全然知らないやつですよ」
間違いではないことを口にする。
そう、知っているのはわたしで、彼はわたしを知らないんだ。
しかしゴッツ先輩は、胡散臭そうに眉をひそめた。
「今見つめあってたじゃねーかっ」
「それはたんに――」
彼はそこで言葉をとめ、もう一度わたしのほうを見る。
――たんに？　なに？　まさか、わたしがあまりにもかわいかったから？
わたしはそう考えてから、
――ないわね。ないない。ありえない。
自分ですぐに否定した。大方、わたしの格好に呆れたから、と言いたいんだろう。うん、さっきのはそんな顔だった。
彼はそれ以上なにも言わずに、おもむろにゲートからおりはじめる。どうやら飛ぶのは諦めたようだ。
「俺、筋トレのほうに行ってきます」
はっきりとそう告げて、その場をゴッツ先輩に譲る。
するとすかさずゴッツ先輩が、わたしのほうをチラチラと見ながら彼に告げた。
「おいおい、トレーニングルームで変なことすんなよ？」
「しませんよっ！」
少し顔を赤らめて叫んだ彼に、ゴッツ先輩はニヤリ唇の端をあげたあと、意気揚々とスタートバーに腰をかける。
――あ。
（羨ましいなんて思ってないんだからな！）
おかげでゴッツ先輩の本心が見えて、ちょっとかわいいと思ってしまった。
そして口では、
「こーんなにいい風なのに、もったいねぇなぁ」

と独り言のように呟いたゴッツ先輩。横目で彼をチラリと見たあと、五秒と経たずに滑りおりていく。
その背中をずっと見ていたわたしは、
（早く飛べるようになれ！）
そんな気持ちを見つけて、嬉しくなった。
――口では厳しく言ってても、ちゃんと心配してるのね。
彼もそれをわかっていればいいけれど――と、背中を見たら杞憂だったことを知る。
（なんで飛べないんだ、俺は……っ）
自分を不甲斐なく思うのは、期待されていることを自覚している証拠なんだ。
ゴッツ先輩の背中が見えなくなっても、彼はずっとその残像を見つめていた。
（高く飛べる勇気が欲しい）
背中でそう、語りながら。
「――！」
不意に、再びこちらを向く。わたしの無遠慮な視線が気になるらしい。
――あたりまえか。
「なんなんだよ、おまえっ。ここは一般人が勝手に入っていい場所じゃないんだ。さっさと出ていかないと、また俺が怒られるんだからな！」
わたしのせいでゴッツ先輩に怒鳴られたことを根に持っているのか、力いっぱい怒鳴ってくる彼。それからスキー板を足から外して担ぐと、リフト乗り場へと続くスロープを渡っていった。
当然わたしも、それについていく。
――せっかく顔を合わせたんだもの、チャンスだわ！
わたしだって、ただ彼の様子を見るためだけに、わざわざこんな場所に来たわけではないんだ。
前を歩く彼の背中は、屈辱でいっぱいなせいか、わたしが追いか

けていることにはまったく気づいていないようだった。
（どうしてせっかくあがった場所を、わざわざ歩いて戻らきゃならないんだ！）
一歩一歩に自分への怒りをこめた足取りで、どんどんと進んでいく。
さっき飛べなかったことが、本当に悔しいらしい。
――仕方ないわよね。
三〇秒はおろか、何分経っても滑り出せなかった彼は、もしこれが大会ならばとっくに失格だ。そしてもし、これが団体戦だったなら――彼は仲間のみんなに迷惑をかけていたことになる。
（本当に、屈辱だ）
何度もそうくり返し、歩きながら、彼の視線はときおりすれ違う他の学校の生徒たちにも向けられていた。
――あらら。
彼らも実にわかりやすい目を向けてくる。いわく、「なぜこちらに歩いてきているのか？」と問うような目を。そう、彼らはこれからジャンプをしにいく選手たちなんだ。
そもそもこの銀蝶山ジャンプ競技場は、地元学生の技術向上のためにつくられたもの。週末にはこうしてノーマルヒルのジャンプ台が解放され、北海道内各地から選手たちが集まってくるのだという。
（今の時間帯は高校生ばかりだけど、飛べないやつはひとりもいない。そういうやつは、そもそもこんな場所に来ないからな）
だから当然、リフト乗り場に向かっているのは自分ひとりなんだと、彼は自嘲気味に考えている。
――ん？　あれ？
「……」
しかしやがて、突然きょろきょろと辺りを見まわしだした。
（待て、みんなの視線の動きがおかしい！）
そう考えて、どうやらその理由を探っているようだ。もちろん言うまでもなく、原因はわたしなんだけど。

――だってみんな、彼を見たあと、その後ろを歩いてるわたしをも見るんだもの。
そして一様に、驚いた顔をしてくれる。なかには変に照れた人や、顔を赤らめた人までいた。高校のスキージャンプには女子部がないため、ここにいるのは男子ばかりなんだから、ある意味仕方がないのかもしれない。
そしてとうとう彼の視線も、わたしを捉える。
「――！　おまえ……っ」
身体ごと振り返って、こちらに近づいてくると、彼は力いっぱい叫んだ。
「後ろ、ついてくるなよ！」
周囲の空気がびんびんと痺れる。
それでもわたしは、怯まなかった。
――だって、怖くなんかないもの。飛ぶことを怖がっているような人に怒鳴られたって、説得力がないわ。
強く睨んでくる彼の視線を受けとめ、わたしはまっすぐに見返してやる。
たとえ背中が見えなくても、彼の瞳はその感情を雄弁に語っていた。
――イライラしてるわね。
そして、飄々としているわたしに、腹を立てている。
ずっと無言を返していると、彼のほうが先に折れて、再びまわれ右をした。そのまま歩き出す。
わたしもまた、ついていく。
彼の背中が見えて、すぐに感情が飛んできた。
（そういやこいつ、さっき「そんな気持ちで飛んでも怪我するだけ」とか言ってたっけ？）
わたしが告げたことを、思い出しているんだ。それから吐き出すように、心のなかでも声を荒げる。
（俺のなにがわかるっていうんだ！）

その半分は、哀しみのようだった。
見ているだけのわたしにまで、ダイレクトに伝わってくる想い。
――苦しいのね、とっても。
飛びたくても飛べないから。
忘れたくても、忘れられないから。
でもその理由は、全部彼のなかにしかなくて。
彼が自分でそれを解決しない限り、空を舞うことは叶わない。
――でもね、だからこそわたしがいるんだよ。
そう、わたしはなにも遊びにきたのではないんだ。さっきも言ったけれど、彼に会いにきた。彼の状態を確かめにきた。そして最終的には、彼を救いたかった。
わたしの手のなかでくるりとまわる、この向日葵のためにも――。
そんなふうに、わたしの決意はとても固くて。同時に、わたしにとって彼の言葉など、ないに等しいものだったから、無視をしつづけた。
「おいっ、ついてくるなって言ってるだろ！？」
何度彼が振り返って叫んでも、言うことを聞く義務なんてないんだ。わたしと彼は他人同士で、彼は内閣総理大臣でもわたしの先生でもないんだから。
――うーん、でも『先生』程度だったら、わたしはやっぱり言うことを聞かないかもね。
自分の思考を自分で訂正して、彼を追いつづけた。
（なんなんだ！？　あいつ……これじゃあマジで、俺の女だと思われちまいそうじゃないかっ）
そんなことを心配している彼が、なんだかかわいくさえ思えてくる。わたしは別に、彼の女だと思われても構わないのに。
――どうせ、ひと冬のアバンチュールだし。
なんて馬鹿なことを考えてしまったから、ポーカーフェイスな振りをするのに苦労した。だって彼ったら、まるで一塁を牽制するピッチャーみたいに鋭い反応で振り返るんだもの。油断をしていたら、

笑いをこらえきれなかった顔を見られてしまいそうでやばかった。
――見られたら、おしまいだわ。
わたしのクールなイメージが台無しになってしまう。浪速の向日葵娘と呼んでもらえなくなる。
ちなみに、一度も呼ばれたことなんてないけど。
そうこうしているうちに、わたしたちはとうとうリフト乗り場までたどり着いた。
すると、彼もさすがに業を煮やしたのか、再びわたしのほうへと詰め寄ってくる。どうやら、リフトがふたり乗りなので、隣に乗られることを警戒しているようだ。
「いい加減にしろ！　おまえ、一体なんなんだ？　俺になんか用あんのか？　馬鹿なのかっ？　そもそも、なんでそんな寒そうな格好してんだよ！？　見てるこっちが寒いだろーがっ」
論点をずらしながらも怒鳴りおえた彼は、肩で息をしている。
――驚いたー。
もしこれが漫画だったら、わたしの長い黒髪は確実に、彼の発言の勢いだけで後ろになびいていたことだろう。残念ながら漫画ではないので、わたしの耳が痛かっただけだけど。
おかげで一瞬、なにを言われたのか忘れかけてしまった。
――えーと、「なんで寒そうな格好をしているのか？」だっけ。
わたしから言わせてもらえば、「寒そう」じゃなくて明らかに「寒い」格好なんだけど、そんなことを今つっこんだところで意味がないからやめておく。
かわりに、ゆっくりと言葉を紡いだ。
「だって、これがわたしのユニホームだから」
「いや、そりゃそうだろうけど、コートでもなんでも着ればいいだろ！？」
せっかく答えてあげたのに、キレ気味の彼は再び怒鳴ってくる。
――もうっ、わたしにイライラをぶつけないでほしいわ。
もちろん、彼がイラついている原因の一端が、わたしの行動にも

あることはわかっている。でも仕方ないんだ、それがわたしの仕事だから。
手もとの向日葵を、もう一度くるりとまわしたら、彼の視線は一瞬そちらに逸れた。
そして不意に、何事もなかったかのように、彼自身もくるりと振り返る。
（――よし、やっぱり無視しよう！）
見えた背中からそんな思考が届いて、わたしはこらえきれなかった。
――あ、いけないっ。
慌てて向日葵で口もとを隠す。もっとも、彼はわたしを無視すると決めたようだから、もう振り返ることもないのだろうけど。
その証拠に、彼はこんなことを考えていた。
（きっと、こいつとは会話をしようとしても無駄なんだ。そうだ、そうに違いない。そもそも俺は昔から、女なんて異星人とはコンタクトが取れないじゃないか。武志に翻訳してもらってやっと会話できるくらいのレベル。英検で言うと、そう、五級くらいなんだ。突飛な思考回路の持ち主が相手だと、レベルが高すぎて意味がわからない。だから会話なんて無理なんだ！）
そうしてやってきたリフトに乗りこんだから、わたしも急いで逆側にまわりこむと飛び乗ってやる。嫌がらせならお手のものだ。
「おいっ！」
すかさず文句を言おうとした彼にも、隙は与えない。
「スキー板、ちゃんと置かないと危ないよ？」
彼が手に持ったままだったから助言したら、彼は「く……っ」と唇を噛みしめていた。きっと文句を言いたかったに違いないけれど、図星だったから言えなかったんだろう。かわりに手を動かしはじめた。
ジャンプ台は通常山の中腹につくられるため、移動には専用のリフトが使われる。だから、リフトの横にはスキー板を横たえるため

の隙間がついているんだ。
これくらいは、スキージャンプをやらないわたしでもちゃんと調べてきた。誰か褒めて。
どうせ誰も褒めないだろうから話を進めると、彼はスキー板をホルダーに置いたあと、ずっとわたしとは逆のほうを眺めていた。わたしは彼の右側に座っていたから、左側――つまり、ジャンプ台のある方角だ。
おかげでわたしには、隣同士に座っているのに彼の背中がよく見えている。
（ったく、なんでリフトを併設なんてしたんだ！）
彼はまず、そんな文句を言っていた。
のぼるときは期待に胸がいっぱいで楽しいのに、くだるときにこの景色を見せられるのは、やっぱりつらいんだ。
（飛べたら一瞬で終わるはずの景色なのに……）
リフトでおりると五分もかかる。なんというプチ拷問。
しかも、のぼりのリフトとくだりのリフトは同じものなので、これから飛びにいく他校の生徒とリフト上ですれ違うこともかなり多い。
――あらら、みんな殺気立ってるわ～。
これはやっぱり、女であるわたしが隣に座っているから、なんだろう。隣に座るだけなら、いくらでもやってあげるのに。もしかしたらいい商売になるかしら？
そう考えたわたしは、すれ違う男子生徒たちに笑顔で手を振ってあげた。
すると、どんなにこちらを見ないようにしていてもやはり気になるんだろう、彼はますます身体を反対側に向けて、わたしにますます背中を見せてくる。
まるで「見てくれ」と言わんばかりに。
――その挑戦、受けてやろうじゃない！
おかげでわたしの闘志に火がついた。どうしてくれよう。

そっと手を伸ばして、ぺたぺたと彼の背中に触れる。実は、見るだけよりも触ったほうが、心のバランスがよくわかるんだ。どういう理屈でそうなっているのかは、わたし自身もよくわからないけれど。

「うおっ！？」

触られた彼は、変な声を出して身をよじる。

（なんだっ？　逆セクハラか！？）

しかし、ふたり乗りのリフトの上という狭い場所なので、当然逃げようがない。

（こんな狭い場所でなんて、いかがわしい！）

とっさのことで混乱しているのか、そんなことを考えたあと、彼は声をひっくり返しながら叫んだ。

「おい離れろ！　へ、変に思われるだろっ？」

ついでに身体もひっくり返して、わたしの身体を遠くへ追いやろうとしてくる。

でも残念ながら、わたしはそれどころではなかった。彼の背中が、あまりにも衝撃的で。

「――やっぱりおかしい」

「それはこっちのセリフだ！」

「違うわ」

彼のせいで傾いてしまった体勢を正すと、前にある目を見て続ける。

「あなたの『魔方陣』、バランスが変よ。だから気になったの」

そう、彼がイライラしていたり、飛べなかったりと、『いつも』とは違う状態に陥っているのは。一言で説明してしまうと、心の魔方陣のバランスが狂っているからなんだ。

しかし、そもそも魔方陣のなんたるかを知らないのだろう彼は、頭を掻きむしりながら叫んだ。

「だーかーらー、おまえが言ってること全然わっかんねぇって！！」

おかげで、たいして頑丈ではないリフトが揺れる。

それでもわたしは、彼を見つづけた。
――訊かないの？
魔方陣とはなんなのか、バランスとはなにか、狂っているとはどういうことなのか。訊いてくれれば、わたしには答える準備がある。
彼の横顔を、見つづけた。
――飛びたいのなら、訊くべきよ。
わたしみたいなおかしな女が相手でも、見栄を捨ててすがるべき。本当に、自分の気持ちをもとに戻したいのなら。
でも残念ながら、わたしの視線の先で彼は、自分の両耳に手をあてた。どうせならなにも聞かないほうがマシだと、そう判断したのかもしれない。
――弱いね。
やっぱりまだ、弱い。
飛べるときじゃない。
その弱さが、いちばんの原因なのに。
「そのままじゃあなた、一生飛べないよ」
ガッカリしたから、つい口から出てしまった。
「……っ」
耳を塞いでいてもちゃんと聞こえたのか、彼が息を呑んだ音が届く。そして、まだ耳に手を当てたまま、横目でこちらを見てきた。
――あら、今なら訊く気があるの？
なぜ飛べないのかと、気になっているのかもしれない。
視線からそれがわかったから、わたしは言葉を続けた。
「でもわたしなら、あなたが飛べない原因を取り去ってあげられる」
「なん…だって……？」
大きく目を見開いた彼に、手もとの向日葵を見せてやる。
「ただ、ひとつ困ったことがあって。それをやると、この向日葵が枯れちゃうの」
言いながらくるりとまわしてやったら、彼の視線は蝶のようにとまった。

「――造花じゃないのか？」
わたしを不審がっていた彼も、さすがに興味を持ったのか、初めてまともに会話が繋がる。
――でも、造花だなんて失礼しちゃうわ。
確かに、こんな真冬に咲いている向日葵は珍しいかもしれない。だけどもしこれが造花なら、わたしはそもそも「枯れる」なんて言いまわしをしないだろう。わたしにだって一般常識くらいはあるのだ。一応。よく疑われるけど。
半分やけくそになって、わたしは彼の鼻に向日葵の茶色い部分を押しあててやった。
「あ……」
すると小さく呟いた彼は、眉間にしわを寄せて嫌そうな顔をする。そう、別にいいにおいがするわけではないんだ。他の花だって、いいにおいだと思えるものは、実のところかなり少ない。
それでも本物であることはちゃんとわかってくれたのか、彼の喉がごくりと鳴った。
――わたしの言うことを、信じてくれた？
視線で尋ねたわたしに、答えるように彼の口もとが動く。
「どうすれば、いい？」
初めて穏やかに、訊いてきた言葉。
その瞳は、今までと違って真剣そのものだった。
とにかく飛びたいのだと、わたしに強く訴えていた。
わたしは向日葵を自分の胸もとに戻すと、目を細めて条件を出してやる。
「かわりの向日葵を、探してくれたら」
この向日葵は、わたし自身。
枯れたままではわたしも生きていけない。
だから、かわりの向日葵が必要なんだ。
それがあればわたしは、彼をもう一度飛ばせてあげられる。
「え――」

彼がぽかんと口を開けた隙に、わたしはひょいとそのリフトからおりた。ちょうど下に着いたからだ。
――言いたいことは、全部言えたもの。
あとは彼が考える番。
ひたすらに、考える番なんだ。
だからわたしは、それ以上は決して振り返らずに、さらに下へとおりてゆくスロープを渡っていった。これまでとは逆で、背中に彼の視線を感じながら。
しばらく歩いて、歩いて、歩いて。
それからやっと振り返ったら、リフトからおり損ねて再び上へとあがってゆく彼の姿が見えた。
（こんな真冬に、向日葵を探せだって？）
諦めの早い背中。
そして、わたしはこんなにも真剣なのに、からかわれたと思いはじめている、弱さ。
誰が彼を弱くしてしまったの？
空へと問いかけながら、わたしはしばらく立ちつくしていた。
ときおり、くしゃみをしながら。

【2】

わたしが調べたところによると、石松武志は彼にとって自慢の親友だったという。なにをやらせても抜群にうまくて、賢くして、輝いていたんだって。

だから彼は、周囲からキモいと言われても本気で武志くんを自慢に思っていたし、『武志くんの親友』というポジションにいる自分も自慢だったそうだ。

ふたりは幼なじみで、それこそ幼稚園の頃から仲が良かったらしい。

武志くんと違って彼は、基本的に不器用な人間だったけれど、武志くんが丁寧に教えたことによって、なにをやっても『二番』を取れるようになったんだと聞いた（『一番』は当然武志くん自身だ）。

そういう関係だったから、彼は常々こんなことを言っていたんだって。

「武志がいなかったらきっと、俺なんて下から数えたほうが早いよ」

だからそうならないために、自然と武志くんのそばにあろうとしていたんだ。

武志くんと同じものを選んで、その背中を追いかけた。

そして当然武志くんも、彼が自分と同じものを意図的に選んでいることを知っていた。

知っていて、ある日彼に告げた。

「僕はスキージャンプをやる！」

どうやら武志くんは、彼にそれをやらせたくて、そのために自分もやると言い出したらしい。

これは近所の人から聞いた話だけれど、彼の父親はスキージャンプの大ファンで、常々息子にもスキージャンプをやらせたいと言っていたそうだ。

武志くんももちろんそれを知っていて、彼の父親の願いを叶える

ために、彼をスキージャンプの世界に引きこんだのかもしれない。
——そう、逆にいえば、彼がスキージャンプを選んだのは、ただのなりゆきに過ぎなかったということなのよ。
彼はスキージャンプが好きで始めたわけでも、空が好きで始めたわけでもなかった。
そのとき彼の心のなかにあったのはきっと、親友の活躍をそばで見たいとか、自分もそれなりに活躍したいとか、そういう軽い気持ちだったんだと思う。
それは、これまで武志くんと一緒にやってきた多くのことと、変わらない感覚だっただろう。
でも残念ながら、今回ばかりはうまくいかなかった。
——武志くんのほうは、ちゃんと活躍したんだけどね。
めきめきと力をつけていって、武志くんは中学生のうちに道代表に選ばれるまでになった。高校に入ってからも、すぐに部のエースとして認められて、先輩を差しおいて団体戦のメンバーにトップ指名されたほどなんだって。
それなのに彼は、ついていけなかった。
いつもは武志くんのおかげでわりと楽にその下まではいけたのに、スキージャンプだけはなぜかうまくできなかったんだ。
そばにいくどころか、いつも下から見あげるばかりで。
——そのとき初めて、彼は必死になった。
誰が見てもそうとわかるほど、がむしゃらに練習していたらしい。よほど悔しかったんだろう。
そして練習を重ねていくうちに、彼はやっとスキージャンプの楽しさに気づいた。
スキージャンプを、好きになってしまった。
——それは、どちらにとってもプラスになるはずだったのに。

＊

今日もわたしは、彼を見つめている。
もう何日目になるだろう。そろそろ警察に通報されそうで怖いけれど、ここでやめるわけにはいかないんだ。なにせ、彼の問題はまだなにひとつ解決していないのだから。
――今日も筋力トレーニングなのね。
学校にあるトレーニングルームへと入っていく彼を追って、わたしも窓際へと移動する。
平日はジャンプ台に飛びには行けないから、選手ひとりひとりがそれぞれにトレーニングをすることになっているようだ。そもそも部員が少ないから、集まっても意味がないんだろう。
彼が最初に選んだのは、足首に負荷をかけて足を持ちあげる運動をするマシンだった。さっそくわたしも、背後を取るように移動する。
移動したから、わかってしまった。
――それで今日も、やっぱり集中してないのね。
彼の心のなかが見えているわたしには、ばればれだ。
彼はまた、あのときのことを思い出している。
それは、武志くんがごろごろと転がったときではなくて、それよりも前のこと。
武志くんが失敗ジャンプを飛ぶ原因になったと、彼が思いこんでいる出来事だ。
わたしは向日葵の茎を強く握りしめて、いつもは受け取るだけの心を、こちらからも投げてやる。するとわたしの心は彼のなかに入りこみ、彼の頭のなかで繰り広げられている想像まで、捉えることができようになるんだ。
――かなり疲れるから、あまりやりたくないんだけどね。
今日は特別。もう一度、見てみよう。
「――昨日さ、『なんで時枝は本気で飛ばないんだ？』って、コーチに訊かれたよ」
するとまず聞こえてきたのは、武志くんの声だった。視線を振っ

て姿を探すと、学校へ向かう途中だろうか、制服を着たふたりが道路を歩いているのが見える。
「はぁ？　なに言ってんだ、俺は充分本気だぞ」
そう答えた彼の口もとは、苦笑に歪んでいた。
「嘘だ」
それを責めるように、武志くんの鋭い声が響く。彼と違い、武志くんの瞳は真剣そのものだった。
「気づいてないの？　踏み切り（サッツ）のイメージトレーニングでさ、コーチが台から一歩さがるのは、きみのときだけだよ。そうしないと、きみが飛ぶのを支えきれないからだ」
そう分析する武志くん。
「……」
否定も肯定もせず、彼は無言を返した。
――でも、わたしも見たわ。
昨日の練習では、彼も踏み切りのイメージトレーニングをやっていたんだ。それは、台の上から斜め上に飛んで、下から身体を支えてもらう練習法だ。地上でも飛ぶ感覚が鈍らないようにと、頭のなかで実際に飛ぶ瞬間をイメージして行うから、イメトレと言われているらしい。
スキージャンプの要素でも、飛び出しはかなり重要なもので、力強い踏み切りが最良のタイミングでできれば、飛距離はかなり伸びるのだという。
――彼が踏み切りの練習をしてるとき、コーチは確かに他の選手のときよりも一歩さがってた。
それだけ彼の踏み切りが、他の選手よりもしっかりしているということなんだ。
ふたりはそのまま赤信号で足をとめたけれど、視線はまったく交わらない。どうも彼のほうが、自分から外しているように見える。
「それは、練習だからこそ思いっきりできるんだろ？　実際ジャンプ台の上に立ったら、俺だってやっぱ少しは怖くなるんだ」

「嘘だ」
武志くんはもう一度短く応えると、彼の進路を遮るように身体の向きを変える。
「僕は本番のほうが思いっきり飛べるよ。だってイメトレのときみたいに、コーチに身体を落とされる心配がないもの」
「おいおい、俺とおまえを一緒にするなよ」
「どうして？　きみは今まで僕の後ろでのびのびとやってきたじゃないか。今さら畏縮するなんて、僕から見たらありえないことなんだよ」
はっきりと告げた武志くんの言葉に、彼は深く息を呑みこむ。
「……っ」
――何度見ても、いい気がしない場面だわ。
息を呑んだのはわたしも同じだった。
やさしそうな顔をして、武志くんは彼を甘やかさない。
そして甘い彼は、それに耐えられない。
信号が青になったのをいいことに、彼はそこから逃れるように走り出した。
その手を、素早く武志くんが捕まえる。
「僕はきみの――」
――そう、いつもここで終わるのよ。
彼の記憶。
彼が一ヶ月ほど前に経験したはずの、記憶。
ここから先はまっ黒に塗りつぶされてしまって、わたしは追い出される。
実際はこのあと、彼が武志くんの手を振りきって道路に飛び出して。そこに右折してきた車があって轢かれそうになったところを、武志くんに助けられるんだ。
そのせいで武志くんが足を捻挫してしまったから、先日の大会でジャンプを失敗してしまったんだと、彼は思いこんでいる。
身体を動かしているあいだ、ずっとそのことばかりを考えている。

（ごめん）
その言葉が、彼の背に一体何度浮かんだことだろう。
（絶対、優勝するから）
その誓いが、何度彼自身を責めるのだろう。
まだ飛べないのに。
彼が飛べなければ、団体戦での優勝など不可能なのに。
彼は集中しない。
彼が初めてわたしを認識したあの日のように、今度イライラしているのはわたしのほうだった。
――いっそ、出ていって叫んでやろうかしら？
わたしがそんな不穏なことを考えたとき、ゴッツ先輩が彼のもとへと近づいていく。
――あら、ちょうどいいわね。きつ～く言っちゃって！
わたしはそう期待したんだけど、意外にもゴッツ先輩の口調は穏やかだった。
しかも、
「おい時枝、おまえの彼女また来てるぞ？」
そんな内容だったから、わたしは反射的に壁の陰にしゃがみこむ。
――うん、当然ばれてるとは思ってたけどね。
残念ながら、わたしは忍者の末裔ではないし、探偵としての特訓をしたこともない。
「だから、彼女じゃないですってば！」
壁の向こうから、全力で否定する彼の声が聞こえてくる。
わたしは再びそろそろと、窓の端から部屋のなかを見てみた。
彼に怒鳴られても、ゴッツ先輩は気分を害した様子もなく、本気で不思議そうな目をしている。
「じゃあなんだ？　追っかけか？　石松にならともかく、成績のパッとしないおまえに追っかけか！？」
「……むしろストーカーですよ……」
脱力したように足をさげた彼の背中には、

（不思議に思いたいのは俺のほうだ！）
とばっちり書かれていた。
――相変わらず、認めないのねぇ。
わたしだって、理由なく彼の周りに現れているわけではない。それに、その理由はすでに伝えてあるんだ。彼が新しい向日葵を探してくれると言うなら、わたしだってこんなふうに見張らなくていいから楽なのに。
――そうよ、なにも言わないのが悪いのよ？
おまけに彼は、うろちょろしているわたしの存在をよほど認めたくないのか、普段はわたしのことを完璧に無視していたのだった。本当は気づいているくせに、まったく気づかない振りをして。
――もう完全に、根比べね！
それならわたしは負けない。
弱いあなたには、負ける気がしないわ！
そう気合を入れたわたしは、彼がトレーニングルームから出てくるのを、ひたすら待ちつづけた。
そして出てきた瞬間を見はからって、ドアの横からさっと足を出してやる。
「え……っ！？」
窓のところからわたしの姿が見えなくなって、多分安心していたのだろう彼は、ものの見事に引っかかってくれた。
「いってぇ……」
前から地面につっこんで、あちこち押さえながらこちらを振り返る。
「あ！　てめぇっ」
「練習中にぼんやりしていると、怪我をするのよ」
「今練習中じゃねーし！　おまえのせいで今怪我したし！！」
わたしを睨む目が、「帰ったんじゃなかったのかよっ？」と追加で叫んでいた。本当にわかりやすい人だ。
彼に一歩近づいたわたしは、土のついた部分を力いっぱい払って

あげる。
「ちょ……いてぇって！　やめろっ」
「そもそも集中しなきゃ、練習だって意味がないでしょ？」
「――っ」
彼が下唇を噛んだのは、今の練習が自分のためになっていないことを、ちゃんと理解しているからなんだろう。
わたしの身体をぐいと押しやった彼は、くるりと背を向ける。てっきりそのまま行ってしまうのかと思ったら、意外にもこちらに話しかけてきた。
「おまえさ、俺のことからかってんだろ？」
「あら、どうして？」
わざと軽い調子で訊いたら、彼はもう一度こちらを見る。
「……こんな真冬に向日葵を探せなんて、言うほうがおかしいだろ！　っていうか、なんでその向日葵は咲いてんだよ！？」
後半は、もはや涙目だった。
――うん、なんだかんだ言って、真面目すぎるのよねぇ。
彼が飛べないのは、その辺の理由も大きい気がする。
どんなに悪ぶって見せても、わたしにはなにも隠せない。彼の心根はどうしようもないほどやさしくて、それゆえに彼は、きっと自分を追いつめすぎてしまうんだ。
何日かぶりにまっすぐ見つめあって、わたしは告げる。
「だったら、飛べばいいんだよ」
「え……？」
それがさも簡単なことであるように、告げる。
「だから、言ったでしょう？　向日葵を探すのは、あなたが飛ぶため。つまり、あなたが自力で飛べるなら、向日葵は最初からいらないの」
「……」
彼は呆気にとられた顔をした。
ほんの数ヶ月前までは、それが本当に簡単なことであったことさ

えも、忘れて。
「マリー・アントワネットかよ、おまえは……」
そう呟いて息を吐くと、今度こそとぼとぼと歩いていった。
答えはまだ、くれないらしい。
仕方なく、わたしは背中に声をかける。わたしの想いは、言葉にしないと伝わらないから。
「今週末、最後のジャンプ練習でしょう？　そこで飛べなきゃ、向日葵を探すことね」
すると彼は、振り向かないまま「うっせーよ！」と叫んだ。
ある意味それは、未来の自分へ告げた言葉なのかもしれなかった。

【3】

日曜日にはわたしも、銀蝶山ジャンプ競技場へと向かった。彼のこれからを、見届けなければならなかったからだ。

――大会まで、あと一週間だもんね。

いくら過去に飛んでいた選手だと言っても、実際のジャンプ練習をしないまま大会に臨むなど、危険すぎる行為だ。もし今日彼が飛べなかったら、団体戦のメンバーを外される可能性だってあった。

そう、今回の大会は、高校対抗の団体戦なんだ。各高校から三名ずつの選手が出場し、ポイントを競う。

そして確か、去年の同じ大会には武志くんが出場していて、一年生ながら優勝に貢献していた、という話だった。当然、今年もそれを期待されていたのに、怪我のせいで出られない――。

（かわりに選ばれたのが、どうして飛べない俺なんだ……？）

部員たちの輪から少し離れた位置で、準備運動をしていた彼の背中を見やると、心が滑りこんでくる。

（俺が本気を出すことを、期待してるっていうのか？）

武志くんが言っていたことを、彼は思い出しているんだ。

「――昨日さ、『なんで時枝は本気で飛ばないんだ？』って、コーチに訊かれたよ」

その言葉は、逆に言えば「もっと力を出せるはずだ」と思われている、ということだった。

現に、彼の所属する部のなかには、彼より飛べる選手が五人もいる。部員は全部で六人なのに、そのうちの五人。ようするに、全員彼よりも飛べるのだった。

それなのに、武志くんがいないとはいえ、団体戦メンバー三人のなかに選ばれるのは、誰がどう見てもおかしい話なんだ。しかも今、彼は飛べないというのに。

――そういうプレッシャーが、よけいに飛べなくなってる原因で

もあるんだけど。
（自分に才能がないことくらい、俺がいちばんよくわかってる）
無心で身体をほぐしているように見せていても、彼の心のなかは揺れに揺れていた。
（でも諦めるわけにはいかないんだ！）
そうして背中一面を占めるのは、「優勝したい」という想い。
――武志くんが望んでいたからね。
彼はかわりに優勝したいと思っているんだ。それで罪ほろぼしができるとは思っていないけれど、せめてそれだけはと、強く願っている。
（それくらいしないと、二度と顔なんて合わせられない――）
そう、彼が武志くんを見舞ったのは、結局最初の一回きりだと聞いている。しかもずっと床を見つめていたから、お互い顔なんて見ていないらしい。
――そういう部分でも、気が弱いのよね。
武志くんがどんな表情をしていたのか、確かめるのが怖くて。憎まれているかもしれないと、嫌われたかもしれないと、考えてしまったら顔をあげられなかったんだろう。
――本当に、かわいい人。
わたしはついそんなふうに思ってしまった。男子高校生に言う言葉ではないけれど、彼なら結構似合う気がする。
（かなり勝手な願いだけど、武志には笑っててほしいんだ）
なんて考えるような人を、「かわいい」以外に形容する言葉を知らない。少なくともわたしは。
だから、わたしも願っている。
――飛んでほしいよ。
わたしだって、飛んでほしい。
そのためなら、どんなに変だと思われても構わないんだ。
寒さを両手のこぶしでこらえて、わたしはスキー板を担いで移動を始めた彼を追った。

今日の彼はまだ、わたしの存在に気づいていない。絶対に飛びたいと思っているから、集中しているんだろう。
彼の周りにいる部員たちは気づいていたようだけど、最近いつも顔を合わせていたからか、あまり気にしないようになってくれた。唯一ときおりわたしを睨んでくるのは、例のゴッツ先輩くらいだ。
――でもあの人、全然憎めないのよねぇ。
なにせ、あの人がいちばん彼のことを心配しているんだと、心を見てわかっているから。普段の言動がきつくなってしまうのは、それこそ心から飛べるようになってほしいと思っているからなんだ。
彼は、いいメンバーに恵まれている。
きっと彼が飛べなくたって、誰も責めたりしない。
――彼はそんなこと、信じないでしょうけどね。
まっすぐに歩いてゆく彼の背中を見て、わたしはそう感じていた。今の彼は悪い意味で、武志くんのことで頭がいっぱいなんだ。
周りを見渡す余裕がない。
自分以外の人を、誰も見ていない。
わたしのことだって、おそらく「変な女」くらいにしか思っていないだろう。答えをあげると言っているのに、立ち向かおうとしないんだもの。
結局はなにも、見えていないんだ。

＊

まるで一週間前を、見ているようだった。
スタートバーに腰かけることはできても、それ以上を踏み出せない彼。
後ろから見てみてもわかる、頭のなかで何度もくり返されている映像。
――忘れてしまえばいいのに。
人はそう便利にはできていない。

彼にはまだ、それを振り切るだけの気持ちがない。それは、心の魔方陣がバランスを失っているゆえに、うわべだけの気持ちしか持てないからだ。

――『魔方陣』なんて言ったら、大抵の人は笑うんだけど。

彼は笑うどころか、きれいに無視をしてくれた。すごく大事な要素なのに。

人の背中に触れると、わたしにはわかるんだ。正の感情と負の感情、バランスよく配置されている人の心。けれど、彼のようにバランスを失ってしまうと、今まで普通にできていたことが、途端にできなくなってしまうという状態に陥る。

――心のバランスがおかしいのだと、自分で理解しなければ、それは治らないのよ。

だから教えてあげているのに、あの態度。いい加減、無理やり背中を押してあげようかしら。

まだ空を見あげたまま、滑り出さない彼に、わたしはそんな意地悪さえ考える。

一方的に心配しているくせに、無茶な言い草だと自分でも思うけれど、わたしだってそれだけ本気なんだから。

いつもはすぐ彼に声をかけるゴッツ先輩も、今日はかける気がないようで、遠く離れた位置から彼のほうを見ていた。

そして彼は、そのことにすら気づかずに、自分を責めつづけている。

（どうして、俺は……どうして飛べないんだ……！）

そんな痛々しいだけの背中を、これ以上見ているのも嫌で、わたしはそっと柱の陰から抜け出した。

その瞬間に辺りがざわついたのは、当然他の選手たちがわたしに気づいたからだ。わたしが、本来ならばここにいるはずのない『女』で、そしてセーラー服姿だから。向日葵を持っているから。

理由はたくさんあるけれど、そのどれも、彼が飛べない理由ではない。

――彼が飛べない理由はここにはなくて、彼のなかにしかないんだ。
わたしはそれを知らしめるために、みんなの視線を集めながら彼に近づいていった。
それでも彼がまったく気づかないのは、飛べない自分に唖然としつづけているから。
その肩にポンと手を置くと、瞬間大きく跳ねる身体。
「うおっ！？」
うっかりそのままスタートしそうになったところを、彼は慌ててスタートバーにしがみつき助かった。
「なんだよっ、あぶねぇだろ！？」
よほど怖かったのか、身体を起こしながら涙目でわたしに訴えてくる。
だからわたしは、きっぱりと言ってあげた。
「本当に危ないのは、そんな気持ちで飛ぼうとしているあなたのほうだって、前にも言ったでしょう？」
すると、スタートバーに座りなおした彼の頬に、さっと朱色が走る。それから悔しさを噛みしめるように、下唇を噛んで、
「――『そんな』って、どんなだよ。俺はただ、飛ぼうとしてるだけじゃないか……！」
吐き捨てるように呟いた。
「飛べるときに飛ぼうとするのなら、いいんだけどね」
さらに告げると、彼はきつくこちらを睨みあげてくる。
「本当に、なんなんだおまえは！　俺に一体どうしてほしいんだっ？　なんで俺にかまうんだよ……おまえには関係ないだろ！？」
それはきっと、彼がずっと言いたいと思っていた言葉なんだろう。でも言えなかったのは、あまりにもきつい言葉だという自覚があったからなのか。言いおえたあとの彼は、背中を見なくてもそうとわかるくらいはっきりとした後悔の表情を浮かべていた。ふいっと顔を背けて、また空を見あげる。

――確かに、わたしと彼に『関係』なんかないわ。
わたしにとって、これは仕事だもの。それでも心から、彼には飛んでほしいって思っている。
そんな感情を持つことに、『関係』というものは必要なんだろうか？
応援したいというその気持ちだけじゃ、伝わらない？
それなら――
顔では無表情を装って、わたしは向日葵の茎を握りしめる手に少し力をこめた。
「――ねぇ、飛ばないなら、そこをどいてよ」
一歩前に進んで、さらに近づく。
「わたしがかわりに飛ぶわ。ついでに靴とスキー板を貸して」
もう一歩近づいて、指を差した。
「は……？」
いかにも「なにを言っているんだ」という目で、わたしを見あげる彼。
「早くして。他にも順番を待っている人がいるんでしょう？」
腕を掴んで引っぱろうとすると、彼は慌てて振りほどいた。
「いや、待てよっ。おまえ、ジャンプの経験あるのか？」
「あるわけないでしょ」
さらり答えると、彼は目を大きく開いて怒鳴ってくる。
「じゃあなんでそんなこと言うんだ！？」
「うるさいから、あまり大きな声を出さないで。人が来るでしょう？」
「おまえなんかさっさと見つかって連れていかれればいいんだっ」
子どもみたいな反応をする彼は、まだその場所を譲ってくれない。
「いいからどいて。飛ばないまでも、わたしがそこに座る」
「だからっ、それに一体なんの意味がある！？」
「わたしに意味はないわ」
「へ？」

「意味があるのはあなた。あなたの――」
わたしはすっと腕を伸ばして、今度は彼の心臓のあたりを指差す。
「――魔方陣」
「またそれかよ……っ」
彼はそれをからかいだと思ったのか、「やってらんねー」と呟くと、スタートバーの上のお尻を横に滑らせはじめた。やっと『飛ばない決心』がついたようだ。
でも、わたしが飛ぶところを見るつもりはないようで、スキー板を外すとすぐに担いで、スロープのほうへと歩いてゆく。
その背中には、
（素人がスタートバーになんか座れるわけがない）
と書いてあった。
そう、彼はわたしには絶対にできないと思っているから、見る必要がないと判断したんだ。
「わたしも無理だと思う！」
背中に叫んだら、心を読んだうえでの応えだとわかったのか、彼はすごい勢いで振り返った。
「な……っ」
「でもやるよ。わたしは、いつだって前向きだから」
言い切ったあとに身体をくるりと反転させて、スタートバーのほうを向く。
スキー板を履いていないわたしの足は、他の選手たちよりもはるかに自由だ。それでも、スタートバーの端に腰かけたときには、それだけで脚が震えた。
「おいやめろ！　本当に危ないぞっ？」
彼以外の、知らない誰かの声がする。
「万が一落ちたら怪我どころの話じゃ……」
みんなこの場所の怖さを知っているから。
それでも飛んでいるから、わかるんだ。
――ここに座るのが、いかに恐ろしいのかって！

知らないのは、知らなかったのは、ただ見ているだけだったわたし。
本当は、「なぜ飛ばないの？」なんて言う権利のなかったわたしだ。
でも今は、恐怖を分かちあいたい。
少し強くなってきた風を感じながら、わたしはじりじりとお尻を奥のほうにずらしはじめた。さすがに向日葵は邪魔だったから、茎の部分を首もとの隙間から服のなかに入れてやる。おかげで視界は半分向日葵に覆われているけれど、片手が不自由なことよりははるかにマシだった。
目の前に広がるまっ白な斜面――急な斜面に、目がくらむ。座っているのにさらに座りこんでしまいそうな感覚がして、上半身をまっすぐ保つことにさえ苦労した。
――なんて、世界なの。
高いところは、気持ちがいい。わたしは別に高所恐怖症ではないし、絶叫マシーンなんかもむしろ好きなほうだった。
――でも、これは全然違うわ。
遊ぶためでも楽しむためでもなく、ただ飛ぶためにそこにある世界は、景色は、わたしの想像をはるかに絶するものだったんだ。
今わたしを支えているものは、お尻の下にある一本のバーだけ。そこから離れたら、たとえスキー板を履いていないわたしでも、この斜面を転がっていってしまうことだろう。
遠くに見える、あの海と空のあいだに向かって。
「……っ」
うまく息もできずに、心臓が急かすように内側から叩いてくる。
周りの音はなにも聞こえず、ただ風が吹いていることだけは、自分の髪がなびいているからわかった。
――彼は、こんな景色を見てたのね。
座っているだけでも、こんなにもプレッシャーを感じるのに、そのうえで飛ぼうとしている。普段はあたりまえに飛んでいた、その

勇気に拍手を贈りたい。
と、わたしがそんなことを考えたときだった。
ぐいと思い切り左の二の腕を引っぱられ、完全に固まっていたわたしの身体は抵抗することなく移動する。
「あ……！」
お尻が浮いて足に体重がかかった途端、するりと床が抜けるような感覚がした。それでも、わたしの腕を掴む手が確かだったから、わたしの身体は斜面を滑り落ちることなく、もとのまっすぐな地面へと戻される。
「なにやってんだ、馬鹿野郎っ！」
へなへなと座りこんだら、また頭の上から思い切り怒鳴られてしまった。おかげで、顔をあげるまでもなくそれが誰なのかわかる。
「戻ってきたの？」
わたしには無理だと思って、そのまま離れようとしていたのに。
確かめるように上目遣いで尋ねると、彼は照れたようにそっぽを向く。
「悪いか！　おまえは他の部員からなぜか俺の女だと思われてんだよっ。奇行をされると迷惑なんだ！」
なるほど、口は悪いけれど心配してくれたのは間違いないようだ。
――もっとも、わたしが彼に持ってほしい気持ちは、それじゃないんだけど。
まだ震えたままの手足で、そんなことを言ったってきっと説得力はない。
向日葵を自分の手もとに取り出し、心を落ちつかせるためにぎゅっと抱きしめた。
わたしをじろじろと見おろしてくるみんなの視線は痛いけど、今さらだ。それが見えないように、目までつむってしまう。
――震えよ、とまって。わたしは言わなきゃならないの。
乱れてしまった自分の魔方陣を、静かに修復してゆく。
増えた恐怖のかわりに、減ってしまったのは冷静さ。人の心は常

に、複数の要素が同時に動いている。ひとつの心が変化すれば、他の数字も変わるんだ。
――それが、魔方陣。
たとえば九マスの魔方陣なら、五を中心にして、向かうあう数字が一〇になるように配置するとうまくいく。けれど、いつもいつも同じ心が同じ分量だけあるだなんて限らない。昨日は六あったやさしい心が、今日は三しかないかもしれない。そんなとき心の魔方陣は、自動的に数字の入れ替えをして、バランスが崩れないように修復するんだ。動いたやさしい心のかわりに、意地悪な心や哀しい心が減ったり増えたりする。
たったひとつの心だけが、動くことはありえない。わたしはそれをわかっているから、自分の心を素直に受け入れられるのだった。
――でも彼は、違うのね。
増えすぎた恐怖から逃れられない彼は、自分を見失っている。こんなのは自分じゃないと、否定しているから、なにもうまくいかない。
わたしは彼に、自分のなかにある気持ちを全部受け入れてほしかった。全部認めてほしかった。だからこんな無茶をしたんだ。
「お、おい……？　大丈夫か？」
目をつむったまま、わたしが動かなくなったからだろう。先程までとは違い、ちゃんと心配そうな声が降ってきて、わたしの口もとはつい緩んでしまう。
――いけない、向日葵で隠さなきゃ！
こんなときにもこの、大輪の向日葵はとても便利だ。
目を開き、再び見あげた彼の表情は、飼い主の所業に困り果てた犬のようだった。
「ええ、もう大丈夫」
わたしは確かな足つきでしっかり立ちあがると、騒がしい周囲をくるり見まわしてから、もう一度彼に目をとめる。
「わたし、やったわよ。飛ぶのは無理だったけど」

「あたりまえだ！　そう簡単にできてたまるかよっ」
わたしがもとに戻ったからか、彼も調子を取り戻したように叫んだ。
――うん、こっちのほうがやっぱり彼らしいな。
本当はやさしいのに、それを素直に口に出せない彼らしい。
「でもあなたは、わたしがスタートバーに座ることもできないだろうって、思ってたんでしょう？」
彼の眉間にしわが寄る。
「……だったら、なんだ？」
探るように告げられた言葉に、わたしは思い切り息を吸った。
「あなたが不可能だと思ったことを、わたしはやった。わたしが可能だと思っていることを、あなたがやれないはずはないわ」
一字一句はっきりと告げたら、
「――っ」
言葉を失ったのは、彼だけではなかった。
周囲の、彼に飛んでほしいと思っている仲間たちも、わたしから彼へと視線を移動させてゆく。
「向日葵を探すのが無理なら、飛びなさい。わかったわね？」
わたしはわざと強い口調で駄目押しすると、彼がしたようにくるりと身体を回転させ、素早くその場から立ち去る。あまり長い時間ここにいると、そのうち部外者としてつまみ出されそうだったからだ。
そして、それ以上に――
――まだ、とまらないの。
セーラー服から出ている手足の震えはとまっても、心の震えはまだとまらない。
決して慣れることのない寒さが、それに拍車をかける。
対抗するように、わたしは白銀のゲレンデを走った。スキー板なんてなくても、滑り落ちるように。
――どうか、飛んでほしい。

余計なことは頭から追い出したくて、ただそれだけを考えていた。

【4】―1

いよいよ大会当日。
ジャンプ台にのぼる前から彼の頭のなかは、「飛ぶこと」でいっぱいのようだった。
――ゴッツ先輩の優勝杯返還も、選手宣誓も、全然見てなかったわね。
普通なら大会に出られることへの喜びや、これから始まる競技について心をときめかせる開会式なのに、彼の背中から伝わってくることはひとつしかなかった。もしかしたら、一週間前にわたしが身体を張ってみせたことが、彼をより前向きにしているのかもしれない。
――だったら、嬉しいんだけど。
開会式のあとは、それぞれ学校ごとに与えられた待機場所で、身体をほぐしていた。当然わたしも同じ場所に移動して、ストーカーのように彼の一挙一動を見張る。
――『ように』というか、彼も言っていたけどストーカーそのものだわ、知ってる。
わたしだって自覚はあるんだ。彼に心理的危害を加えていないとは、とても言えないから。もともとそれが目的なんだから、仕方ないけど。でも、彼を特別愛しているわけでもなければ、憎んでいるわけでもない。ずっと追いつづけるわけでもないし、どうか許してほしい。こんな寒い格好で、警察には捕まりたくない。
と、そんなふうにわたしが全力でストーカー説を肯定しているあいだに、潜んでいた太いポールの高い位置につけられたスピーカーから、放送が聞こえてきた。
『ただ今より、北海道スキー連盟主催・第三回高校対抗スキージャンプ大会を開始いたします！』
アナウンス担当の女性が、気合の入った声音で宣言する。

それが耳に届いたのか、ずっと同じことしか考えていなかった彼の背中に、変化があった。
（俺が飛ばなきゃ、優勝なんて無理だ）
目を細めて、スピーカーを見あげる彼。
（ゴッツ先輩たちふたりの力だけで勝てるほど、大会は甘くないんだから）
そのあとはまたひたすら、「飛ぶこと」でいっぱいになった。
わたしは彼の、握りしめられた手に気づく。
――アナウンスに負けないくらい、こっちも気合が入ってるみたいね。
それがいい方向に繋がるようにと、わたしは祈るしかない。
立ちつくす彼の周囲を、さまざまな色のウェアに身を包んだ選手たちが、とおりすぎてゆく。
そしてそんななか、彼に近づいてゆく人がひとり。そう、おなじみのゴッツ先輩だ。
しかし、なぜかスピーカーに見入っている彼はそれに気づかず、ドンと背中を叩かれると思い切り飛び跳ねていた。
（まさか、あいつかっ！？）
なんて彼が一瞬考えた『あいつ』とは、もしかしてわたしのことだろうか。
過剰反応をした彼を、ゴッツ先輩は不思議そうに見やりながらも忠告する。
「あんまり力こめてっと、逆にすっ転んじまうぞ？」
「先輩……」
彼はどこかほっとした表情を浮かべて、小さく呟いた。ゴッツ先輩がいつもの怒鳴り口調じゃないから、調子が狂うのかもしれない。
明らかにまだ気負っている彼を見て、ゴッツ先輩は肩を竦める。
「別にな、優勝できなかったら死刑ってわけじゃねえんだから、おめえはとりあえずテレマーク決めることだけ考えてりゃいいんだ」
「けど、飛べなかったら決めようが――」

「馬鹿か？　おめえ馬鹿か？　もちろん飛ぶ前提で言ってんだよっ」
「……」
しかし後半にはいつものノリになったからか、彼の心に『呆れ』と『感謝』が入り乱れる。
（そうだ、俺はそもそも馬鹿なんだ）
飛ぶことだけに一生懸命で、そのあとのことを考えるなんて思いつかなかった彼は、どこか開眼したような気分になっているようだ。もしかしたら、自分のすぐ足もとだけを見てジャンプしようとしていたのかもしれない、と。
（それじゃあ飛べなくて、あたりまえだ）
飛ぶ前ははるか遠くの海を見つめていた彼の目も、飛ぶことを意識しはじめるときっと、それを忘れてしまっていたんだろう。
「先輩、俺――」
「なんつーか、よ。テレマークってホントのこと言うと、あまりかっこいいもんじゃねーだろ？　両手広げて、足も前後に広げて、ズサーって感じだ」
ゴッツ先輩は彼の言葉を遮って続けると、その場で大袈裟なテレマーク姿勢をつくった。
――確かにテレマークって、「セーフ」っぽくていまいちよね。でも、着地するときには必ずやらなければならないんだ。それも点数のうちだから。
周りを行き交う他の選手たちも、ゴッツ先輩のテレマークを見て笑っている。それはどちらかと言えば同意の笑いなんだろう。
（実際、競技者以外が見たらダサいと思っても仕方がないよな）
彼も同意して、口もとに今日初めての笑みを浮かべる。
それから「ゴホン」とわざとらしい咳をしたゴッツ先輩は、姿勢を正すと再び彼のほうを見た。
（え……）
それがこれまでとは違う真剣な目だったから、戸惑っている彼の心が見える。

――ええ、もちろんわたしも戸惑ってますとも！
しかしゴッツ先輩自身はまるで違和感を覚えないのか、その表情を保ったままはっきりと告げた。
「でもな、おめえのはなんか違う。なんか知らねーが妙にきれいなんだ。おめえはきっと足腰が強いんだろうな。正直、テレマークに関しては石松よりおめえのほうが上だと思っている」
「え――」
言われたことが予想外だったんだろう、彼が息を呑む。
（そんなこと言われたの、初めてだ）
そう思いながらも、心から喜んでいることは、充分に伝わってきた。
（俺にも、武志に追いつけてる部分があったのか……）
――へぇ、これは見るのが楽しみだわ。
実際に飛んでいるところをまだ見たことがないわたしは、ますます楽しみになる。
そのあとゴッツ先輩は、さすがに「らしくないことを言っている」と思ったのか、頭を掻きながら乱暴に言った。
「だから、テレマークだけはしっかり決めろと言ってんだ！　別に飛距離は期待してねぇからよ」
「――はい」
噛みしめるように、彼は頷く。
――ああ、やっと少し、心が軽くなったみたいね。
（今日は飛べるかもしれない）
わたしも少し安心する。
――本当に、今日は飛べるかもしれない。
そんな気がした。
希望が持てた。
『それでは一本目の競技を始めます。第四シードの選手のみなさんは、速やかに移動してください』
再び放送がかかり、彼はまた顔をあげた。

――ええと、ジャンプの競技って、公式大会での成績が悪い選手とか、実績のない選手からやるんだっけ。
わたしは事前に勉強してきたことを思い出す。彼が第四シード――順番がかなり最初のほうなのは、高校に入ってからたいした成績を残せていないからだ。今つけているビブナンバーは『3』で、それが飛ぶ順番にもなっている。
まだ顔をあげている彼の横から、ゴッツ先輩が声をかける。
「最高のテレマークを見せてくれ」
彼が顔を戻すと、ゴッツ先輩は親指を立てて笑顔を見せた。
――まあ珍しい！
一瞬ケータイで写真を撮りたいと思ってしまったけれど、残念ながらわたしは盗撮をしない主義だ。撮るときは、カメラに向かって思い切り微笑んでもらおう。
彼もやはり面を食らったようだったけれど、すぐに気を取り戻し強く頷く。
「はい！」
それから深く頭をさげ、スキー板置き場のほうへと向かっていった。
わたしもすぐに追いかける。
ゴッツ先輩のそばをとおるとき、うっかり目が合ってしまったから、一応会釈したら睨まれてしまった。もしかしたら、お邪魔キャラだと思われているのかもしれない。
――目的は、同じなのにね。
彼に飛んでほしい。
そして、わたしも一緒に飛びたい。
彼の見る景色が見たい。
だから、飛んでもらわなきゃ――。
人ごみにまぎれそうになる彼の背中を追って、なんとか追いつくと、スキー板置き場のなかで彼は、コーチにがっちりと両肩を掴まれていた。

「私はもうなにも言わない。おまえが飛びたいように飛べ」
一見無責任にも思えるような言葉だけど、彼がそうとっていないのは心が告げている。
（コーチ……もしかして、自分の発言が引き金になってたことを、知ってるのか？）
今この瞬間に、「本気を出せ」と言わないからだ。コーチが自分の可能性を信じてくれていることを、誰よりも彼自身が感じていた。
「俺は、メンバーに選んでもらっただけで充分ですよ」
その気持ちが本心だということは、わたしにもわかっている。
「時枝……」
意外そうに眉をあげたコーチに、彼は続けた。
「武志のかわりにはとてもなれないけど、俺なりのジャンプをしてきます」
「――ああ」
コーチはまるで、彼に力を分け与えるようにぐっと押してから手を離した。それからそばに立てかけてあったスキー板を取り、彼に渡す。
「ありがとうございます」
「恐怖心に負けるなよ」
頷きながら受け取った彼は、いよいよ空にほど近い戦場へと向かった。
――当然、わたしも行かなくちゃ！
わたしには特等席で見る義務がある。
大会ともなると、さすがに人が多くて入りこみづらいけれど、人の背中を追いつづけて早百年、手慣れているわたしには問題のないレベルだった。
――すみません、嘘をつきました。わたしは生を受けてまだ十六年です。
だけど、もぐりこむことが得意だというのは本当で、どんな場所だろうと自信があったから。

さあ追いかけようと脚に力をこめた途端、肩にふわりとなにかをかけられて、さっきの彼みたいにわたしも大袈裟に反応してしまう。
――な、なにっ？
とっさに振り返ってみると、そこにいたのは意外にもゴッツ先輩だった。そしてゴッツ先輩がわたしにかけてくれたのは、ゴッツ先輩自身も着ている高校公式の青いウェアで――
「どうせおめえも、上まで行く気なんだろ？」
頭を掻きながら訊いてきたから、わたしはおとなしくこくりと頷いた。
――一体どういうつもりなの？
不審には思えど、実はやさしい内面を知っているから、逃げる気にはなれなかった。
するとゴッツ先輩は、ひとつ呆れたような息を吐いて、
「ならそれを着ていけ。セーラー服が丸見えでうろちょろされるより、つまみ出される確率も低いだろ」
「え……」
寒そうだから、ではなくて、彼のもとへと行くために、貸してくれるのか。
「あいつが飛ぶには、どうもうちらだけの言葉じゃ足りねぇみたいだからな。おめえとあいつがどういう関係かは知らねぇが、飛ばせてくれるっつーんなら協力してやるよ」
予想外な展開に、わたしの心も大忙しだ。
「で、でもさっき、わたしのことを睨んでたでしょ？」
念のために確認してみると、ゴッツ先輩の口もとがにやりと歪む。
「ひと睨みしたくらいで逃げるようなら、邪魔なだけだと思ったからな」
どうやら試されていただけらしい。
それからゴッツ先輩は、やっぱり彼にしていたみたいにわたしの背中を思い切り叩くと、
「ほらっ、さっさと行け！　あいつが飛んじまうぞ」

びしりとジャンプ台のほうを指差した。
「はい！　ありがとうございましたっ！！」
反射的に体育会系のノリでお礼を言ったわたしは、急いで走り出す。
彼の背中は完全に見えなくなっていたけれど、もう何度か来ている銀蝶山の競技場だったから助かった。スタートバーのあるところまでの行きかたは、完璧に把握している。
息を切らせてこっそりと上にのぼった頃、「三番、急いで！」という声が聞こえてきた。
――あれ、三番って彼よね。
とわたしが思った瞬間に、
「あ、はいっ」
下のほうから返事をしたのは、確かに彼の声だった。どうやら、全力で走ってきたわたしのほうが先についてしまったらしい。
階段から下を覗きこむようにして見ると、恐縮している彼の後ろ姿があった。
（武志が一緒なら、絶対こんなことはなかったのに）
――そういえば武志くんって、自分の順番がどんなに後ろでも、彼のために上までついていってたんだっけ。
それはおそらく、彼が意外にルーズな性格であることをわかっていて、順番に遅れないよう見張っていたということなんだろう。他でもなく、彼がちゃんと飛べるように。
スキー板を斜めに抱えて、階段を一段抜かしでのぼってくる彼。
「足腰が強いのではないか」という話があったけれど、こういうことをあっさりとできるんだから、それは本当なのかもしれないと思った。
彼が上まであがってくると、ちょうど二番の選手が滑り出してゆく。
「次、三番！」
「はいっ」

緊張した面持ちで、彼はスキー板に足を乗せる。
（いよいよ、だ）
その背中を見ているだけで、わたしの心臓も身体から飛び出していきそうだった。まだ心を預けていないのに、そんなにも同期している。
――わたしも、ずっと待っていたから。
彼が飛ぶ日を、待っていたから。
スタートバーに腰かけて、足もとのスキー板を確かめる彼を見据えた。
（落ちつけ心臓！　今飛ぶべきは、おまえじゃなくて俺だっ）
わたしの視線が彼の背中をすり抜けるように、彼の目がすぅと前を見据える。
「続きまして、ビブナンバー三番――」
アナウンスされた、彼の名前。
――あ……
その瞬間、彼の背中に少しの変化が訪れた。
（練習でいつも使っていたこの場所が、勝負の舞台に変わったんだ）
意識が変わり、白い世界の向こう側に、いつもとは違う海と空の青を見る。
同時にわたしも、一週間前に見たその景色を思い出していた。
人の姿はアリのように小さくて、地上から遠く隔たれたことを教えてくれる――
（――ほんと、馬鹿だよな）
彼の背中が告げる。
世界のなかで一体誰が、初めにこんな場所から飛んでみようと思ったのだろうか、と。
そこにいる彼は、先週までの彼と違って、どこか前向きだった。
そのおかげなのか、彼は思い出していたんだ。しばらく忘れていた、まっとうな恐怖心を。それは落ちることに対してではなく、単純に高さに対するものだった。

（こんな競技を好んでするやつは、みんな馬鹿だ）
彼が心のなかで呟いた瞬間に、風を読んでいた信号が青に変わる。
（けど馬鹿なりに――譲れないものがある！）
強い気持ちがわたしまで届いて、髪がなびいた。
そして彼は、今日まではどうしても離れることのできなかったゲートから、やっと。
やっと今、巣立つことができたんだ。
わたしも一緒に飛ぶために、走り出した彼の背中にすかさず自分の心を乗せる。
――さあ、連れていって！
彼の目をとおして、わたしもいつもとは違う世界を見ようとした。
まずは低い体勢でスピードをつけ、斜面をかけおりてゆく。縦方向のそれは、飛び出しの直前で横方向へと変わり、今度はすべての力を前へ。
前へ。
高く前へと、飛びあがった。
わたしには物差しがないからよくわからないけれど、かなり高く飛んでいるほうだと思う。ジャンプは向かい風のほうが有利だって話だけど、ほとんど無風状態でこれはすごいんじゃないだろうか。
そう考えるわたしの心のなかに、彼の喜びが滑りこんでくる。
（やっと、飛べた……！）
空中で安堵してしまった彼に、しかし記憶は容赦ない。
脳裏にちらちらと悪夢が浮かんだことを、わたしも察知してしまった。そしてそのせいで、一瞬だけ竦んだ足から体勢が崩れてしまう。
――こらえて！
わたしの叫びは届かずに、高度は徐々に落ちていった。
（耐えろ、俺！）
それでも諦めない彼に、昨日までの弱気はない。
（相手は風じゃない、自分の意思なんだっ！）

自分に強く言い聞かせて、広げた足を踏んばり、必死にバランスを取った。
それは、ゴッツ先輩に言われたとおり、しっかりとテレマークを決めるためだったんだろう。
どんなに飛べなくても、それだけは。
そんな強い意思が感じられる力強さで、両腕を大きく広げた。
――渾身のテレマーク……きまったわ！
実際には飛んでいないわたしにも、心のなかに訪れた衝撃。
胸のなかが熱かった。
彼も同じ心を抱えて、まばらな拍手に視線をめぐらす。そこにはゴッツ先輩たちの姿があって、彼は右手の親指を立てて見せた。
（ちゃんと飛べたよ）
それを見たゴッツ先輩は、深く頷いて応える。
対抗するようにわたしも、やっと飛べた彼を今すぐに褒めてあげたかった。
けれどジャンプ台の上と下では、実はかなりの距離がある。わたしがいる場所からは、普通にしていたら飛びおえた彼のいる場所はまったく見えない。今見えているのは、わたしが自分の心を彼に預けているからなんだ。
そこですぐに自分の心を引き戻すと、飛べないわたしは急いでスロープを渡っていく。
わたしが着用しているウェアは上だけで、下はセーラー服のスカートと生足が丸見えだったからか、すれ違う選手や運営の人たちは「なんでこんな場所に？」というような顔でわたしを見てきた。それでも咎められなかったのはきっと、わたしが必死の形相をしていたからだろう。
リフトを使っておりるなんて、ただ座っているなんてもどかしくてできなくて、わたしは走ることを選んだ。手に持っている向日葵と、黒い髪の毛が激しく揺れる。息があがる。
それでも、決して足をとめずに。

走りにくい雪の上を懸命にくだっていたら、やがて視界に意外なものが飛びこんできた。
――え……っ！？
わたしが驚いたのと同時に、
「あ、いた！」
と前方から声がする。
彼だ。
ジャンプを飛びおえたばかりの彼が、なぜか下からのぼってきていたのだった。
――どうして？
今は背中が見えないから、彼の心がわからない。
わたしが戸惑って足をとめると、彼はすぐ近くまでやってきて、わたしの両腕を掴んだ。今まで、彼のほうから近づいてきたことなんて一度もなかったのに！
間髪入れずに、彼は告げる。
「おまえ、俺が飛べない原因を消せるって言ってただろ？　頼む、今からでもいいから消してくれ！！　俺から恐怖心を取り除いてくれっ」
わたしは思わず、目を見開いた。
「どうして？　飛べたんだから、それでいいじゃない」
「いいもんか！」
彼はもう一度叫んだあと、ハッと息を呑んで続ける。
「……飛べたのはみんなのおかげだ。武志がそばにいなくても、誰も俺を見捨てなかったから。だから俺は、ただ飛ぶだけじゃなくて、勝ちたいんだ！　二本目をもっと飛んで、みんなに礼がしたい」
――そう、そうなんだ。
彼はやっと、気づきはじめている。飛べなかった原因。まだそれが、心のうちには残っていること。だけど今、武志くんのためだけじゃなくて、みんなのために飛びたいと思っているから。
もっと素直に、受け入れられる。

わたしには、そんな予感があった。
――どうする？　向日葵。
手もとに聞いたら、黄色い花は機嫌よさそうにくるりとまわる。訊くまでもなかったようだ。
わたしは目を細めると、彼に告げた。
「じゃあ、新しい向日葵を」
「探す！　頑張って探すからさ！！」
「わかったわ」
確かな答えを聞いて安心したわたしは、両腕に添えられた彼の両手を丁寧に外す。
「人に見られない場所に行きましょう」
そして自分から彼の手を引いて、今度は歩き出した。
「え……見られちゃ駄目なレベルのことすんの！？」
焦った声をあげながらも、ちゃんとついてくる彼を振り返り、意味深に笑ってあげる。
そうしてやっと下のほうまでおりていくと、この大会のために建てられた小さなプレハブ小屋の裏へと入った。
「――ここなら誰も来ないわ」
本当は小屋のなかに入りたいくらいだったけれど、この小屋は具合が悪くなった人や怪我をした人が休めるようにと用意されたものらしかったから、急患があれば誰か来るかもしれないんだ。それよりなら、裏手のほうが安心だろう。
ひと気のない場所で向かいあうと、彼の喉がごくりと鳴ったことに気づく。よほど緊張しているらしい。もしかしたら、飛ぶときよりも？
――別に、捕って喰ったりはしないのにね。
笑い出したいくらいだったけれど、彼の前ではポーカーフェイスでとおしているからやめておいた。
「あ、あの……？」
早く直してほしいからか、先に声をかけてきた彼。

「後ろ、向いて」
短く指示すると、
「お、おうっ」
と応えながら、彼はぎくしゃくした動作で振り返る。
それを確認してからわたしは、少し空いていた彼との距離を一気に詰めた。そして手もとの向日葵の、花に近いほうを持って、茎の先を彼の背中に当てる。
「うわっ、ちょ……」
文字を書くように這わせたら、彼が身悶えするように身体を動かした。
「やめろ、くすぐったい！」
「我慢して！」
「ぐ……」
動かれるとわたしもやりにくいから注意すると、彼はおとなしく口を紡ぐ。
――勝ちたい気持ちが、よっぽど強いのね。
最初はあんなにも、わたしを否定していたのに。どうせからかっているんだと、信じてくれなかったのに。
嬉しい気持ちと哀しい気持ちが混ざりあい、自分でも心を揺らしながら、わたしは彼の背中に語りかける。
「あなたが飛べなかった原因は、恐怖感だけじゃないわ」
そのキャンバスに、新しい魔方陣を描きながら。
「罪悪感」
口にしたら、魚のようにぴくりと跳ねた。
「どちらも肥大しすぎて、他の感情を食ってたの」
「なんで、それ――」
小さく呟く彼の背中に、本心が見える。
（コーチ以外は、知らないはずなのに……！）
でも残念だけど、わたしは知っていたんだ。武志くん本人に聞いたから。

――あなたは自分のせいだって、思ってるのよね？
彼をかばったせいで、足首を捻挫した武志くんは、その足のまま大会に出場し、空中で体勢を崩してしまった。それでも出場することを選んだのは武志くんで、それを許したのはコーチなのに。
（どんなに考えないようにしていても、罪悪感（それ）からは逃れられなかったんだ）
彼の心が告白する。そしてわたしの言葉を咀嚼し、考えているようだった。
「もしかして、俺を飛べなくしてたのは――？」
答えに近づきはじめた彼に、わたしは「そう」と言葉を繋ぐ。
「わたしにはね、人の心の魔方陣が見えるの。魔方陣ってわかる？一定の条件下に、数字で埋められた方陣よ。ひとつの数字が動けば他の数字も動く」
（まさか、今俺の背中に描いてるのがそれなのか？）
彼の問いは心のうちだけのものだったから、わたしはそれには答えずに続けた。
「数字とは、感情。人の心はすべて数字に置き換えることができる。つまり、ひとつの感情が動くとき、他のすべての感情も動いてるということ。わたしはね、この向日葵で数式を書きこめるの。特定の感情量を変えて、心のバランスをもとに戻すのよ。あなたがそれを自覚できるように――受け入れられるように」
言いおわると、彼は放心したように沈黙する。
――さすがに、そうすぐには信じられないわよね。
わたしだってそうだ。それが自分の力だと知ったとき、心を失ってしまいそうなほど大きな衝撃を受けた。それでも今こうして、その力を受け入れられているのは、周りの人々の支えがあったから。
――あなたも、受け入れなさい。
人の心を支えにして、自分の足で立ちなさい。
想いながら、彼の背中に強く刻んでゆく。
「……は、はは……」

やがて彼の口から漏れたのは、かわいた笑い声だった。
（馬鹿らしいとか、とんだ詭弁だとか）
いつもの自分なら、そう言って笑い飛ばすのに、と。
それができないからこそ、彼は葛藤する。
気持ちが、わたしにもダイレクトに伝わってくる。
（――なんだよ、これ）
ずっと心のなかにもやもやしていた、彼自身にもよくわからなかった感情が、ゆっくりと整理されていくから。自分を責めるばかりで、決して考えることのできなかった疑問が、ちゃんとわきあがってきたから。
気がつくと、彼の背中は小刻みに揺れていた。
「……っ」
きっと泣いているんだ。わたしはそこまで無粋じゃないから、前にまわりこんで確認なんかしないけれど。
とまらない涙に、彼が『とまらなかった血の色』を思い出しているのはわかった。
罪悪感の原因。
そして、過剰な恐怖心の原因。
「……なぁ、もしかしておまえは知ってるのか？」
魔方陣を描きおえ、手をとめていると、不意に彼が振り返る。頬を伝うものを拭いもせずに、わたしをまっすぐに見返してきた。その瞳にはもう、自分のちっぽけなプライドを守るような弱さはない。
わたしが小さく首を傾げると、彼は大きく息を吸って続ける。
「武志は自分の捻挫に気づいていたはずなのに、どうして飛んだんだ！？」
――そう、それよ。
自分を責めるばかりで、彼が決して考えなかった疑問。本当は彼だけに原因があるわけじゃないのに、罪悪感がそれを許さず、認めなかったから、心のバランスが崩れた。
でも、わたしが整理してしまった今は、彼のなかには本当に必要

な分の罪悪感しか残っていない。だから彼は、その疑問にたどり着くことができたんだ。
わたしの肩を掴み、彼はなおも声を荒げる。
「怪我をしてもいいっていう、妥協があったとしか思えない！　でもなぜ！？」
「わたしは知らない」
本当は知っている。
でも、それはわたしが答えても意味のないことだから、あえて流した。
「本人に訊いてみたら？」
「――！」
わたしが促した途端に、彼は走り出す。
（ケータイは鞄のなかだ！）
その背中は、電話をする意思があることを伝えていた。
わたしもすぐに追いかける。
彼らの荷物が置いてある場所には、他の部員たちもいて、鬼気迫る形相で戻った彼を変な目で見ていたけれど、それどころではない彼はまったく気にしていないようだった。
自分の鞄をあさり、なかからケータイを取り出すと、迷いなく番号を呼び出し耳にあてる。
――まったく、素直じゃないんだから。
武志くんはまだ病院に入院していて、ケータイを持っていたとしても繋がらないだろう。つまり、彼が今かけているのはその病院の番号なんだ。いずれ電話をするという覚悟はちゃんとあって、あらかじめ登録しておいたんだろう。
案の定、やがて出た電話の向こうの相手に、武志くんを呼んでほしいと頼んでいる。
わたしはふたりの話を聞きたくて、もう一度、彼の心の片隅に自分の心を送りこんだ。わたし自身が魔方陣を調整したばかりだから、今までよりも楽にもぐりこむことができる。

『急にどうしたの！？　きみ、今日大会だろ？　まさか出てないなんて言わないよねっ？』
すると最初に聞こえてきたのは、そんな武志くんの声だった。彼に比べると少し高くて、特徴のある声だからすぐわかる。
（武志のやつ、話すの久々なのに、まったく変わらないな）
彼はそんなことを思いながら、自分も変わらない調子で返す。
「ああ、一本目はちゃんと飛んだ」
『飛べたんだ！？　よかった、コーチからきみが飛べなくなったって聞いて心配してたんだ』
（……っ）
こんな自分でもまだ心配してくれるのかと、彼は言葉を詰まらせた。
彼にとって武志くんの言葉は、いつもまっすぐ過ぎて。それが逆に、彼の言葉を封じこめてしまっていたのかもしれない。
――そういうことも、あるよね。
誰かの親切が、必ずしも誰かのためになるとは限らないんだ。だから人は、ちゃんと大きく目を開いて、前を見て歩かなきゃならない。
自分の気持ちを、ちゃんと言葉にして伝えなければ。
「――武志」
彼がその名を呼んだら、他の部員たちも武志くんに電話しているんだと気づいて彼に近寄った。
『ん？　なに？　もう二本目の時間？』
彼も当然それをわかっていて、はっきりと口にする。
「捻挫してて、飛ぶのは危険だってわかってたのに、おまえはなぜ飛んだんだ……！？」
「えっ！？」
息を呑んだのは、まわりのみんなだった。
「おい時枝っ、今のどういうことだ？」
「前の大会のことか？」

辺りは途端に騒がしくなるけれど、電話の向こうからはなにも聞こえない。
それでもやがて、すぅと息を吸う音が聞こえて。
『――僕はきみの「本気」が見たいんだ』
耳に届いた言葉に、今度は彼が息を吸う。
（あ……！？）
そしてやっと、思い出したんだ。
彼がいつも頭のなかで反芻していた、悪夢の続き。
あのとき、武志くんが口にした言葉。
「本当は本気を出していないんだろう？」と、心をえぐられた、現実。
『名前のように、大きく飛んで見せてくれよ。優勝できなかったら一生許さないからな、大飛（ひろと）』
笑いを含んだ声で聞かせて、武志くんは一歩的に通話を切った。
彼はまだケータイを耳に当てたまま、動揺を隠せない。
（武志――それならやっぱり、おまえがスキージャンプを選んだのは、本当に……？）
自分のためだったのかと、彼は放心していた。
――そう、それがからくり。
正確には伝わらなかった想い。
それは武志くんのものであり、そして彼の父親のものでもあった。
一九七二年の札幌オリンピック、生で見たスキージャンプの迫力に魅せられてしまった彼の父親は、当時まだつきあっている相手もいなかったのに、こう考えたのだという。
「自分の子どもが産まれたら、絶対にスキージャンプの選手にしよう！」
しかし、子どもがそれをやりたがらなかったら意味がない。そこで彼の父親は、本人にはばれないようジャンプに役立つトレーニングするために、さまざまな遊びを考えては、彼にやらせていた。
そして、武志くんがスキージャンプを選んだことにより、結果的

に彼もその世界へと足を踏み入れる。長年こっそりとスキージャンプのために鍛えあげられてきた身体は、本人のあずかり知らぬところで開花しようとしていたんだ。
（俺がよく「足腰が強い」と言われるのは、間違いなく親父のせいだった）
彼はそう父親を責める一方で、自分の弱さにもちゃんと気づいていた。
（でもその力を発揮できなかったのは、きっと心の奥底で予感していたから）
予感。
それは彼にとっての、悪夢でもあった。
（俺が本気で飛んだら。本気で、踏み切ったら。武志を超してしまうかもしれない――）
輝いている武志くんを下から見あげるのが好きだった彼にとって、あってはならないことだった。だから彼は、自分でも気づかないうちに手を抜いていたんだ。
「――僕はきみの『本気』が見たいんだ」
ひと月前の大会の朝。
運命の交差点で、武志くんが彼に告げた言葉。
暗に「本気を出していないだろ？」と責められた彼は、本人が気づいていなかっただけで図星だったから、よけいに腹を立ててしまった。
「だから、本気出してるって言ってるだろ！？」
怒鳴って飛び出した横断歩道に、右折をしてきた車が入ってきて。
武志くんは、彼をかばって捻挫した。それでも、飛んだ。痛みをおしてまで。
（なんのために？）
――もうわかったでしょう？
（俺の『本気』が、見たいから）
武志くんがはっきりと伝えてくれたおかげで、彼の心はわたしが

手を加えた以上に整理されてきたようだ。
（そのためにどうして怪我をする選択をしたのか、俺にはわからないけど。それがまぎれもなく俺のためだったってことは、ちゃんとわかったから）
背中から、燃えている彼の心が見える。
許してもらえないのは困ると、半分は肩の力を抜きながらも。
（俺はこれからも飛びたいし、武志と競っていきたいんだ。でも許されなければ、飛ぶことは俺の良心が許さない！）
だから飛ぼう。
他のなにを投げ打ってでも。
――あら。
そのとき彼が思い出していた言葉は、
「ひとつの感情が動くとき、他のすべての感情も動いている」
わたしが告げたものだった。

【4】―2

一本目のジャンプをすべて終えたとき、彼のいる高校は四位につけていた。ゴッツ先輩とその下僕が、かなり頑張ってくれたからだ。

――やるじゃない、ゴッツ先輩！

ただやさしくてゴツいだけの人間ではないらしい。本格的に、あとでお礼を言わなければならないかもしれない。ウェアを返すときにでも、ついでに伝えようか。

そんなことを考えながら、わたしが相変わらず木陰からみんなの様子を見守っていると、不意にコーチが彼に近づいていった。

「時枝、二本目行けるのか？」

その開始時刻が近づいてきて、みんなそわそわし出していたところだったから、視線がいっせいに彼へと集まる。

――あのコーチ、きっと彼が武志くんに電話していたことを聞いたのね。

だから不安に思ったんだろう。

彼もそれに気づいているのか、心配させないようにと考えている心が見える。

「大丈夫ですよ、コーチ。K点――いや、あの海を目指します！」

そう告げながら彼がはるか遠くを指差したら、コーチは呆気にとられた顔をしていた。

そして周りのみんなは、盛大に笑っている。

「まあそれくらいのジャンプじゃなきゃ、逆転優勝はできないかもな！」

「期待してるぞ、大飛っ」

「武志のかわりなんだから、真面目にやれよ～」

その反応はさまざまだったけれど、応援してくれていることには違いなかった。

（なんかくすぐったいな……）

照れている彼がかわいくって、わたしはつい笑ってしまう。
これまでは武志くんのついでのようにしか応援されてこなかった彼にとって、それは初めての経験なんだろう。
（さっき背中に魔方陣を描かれたときみたいだ）
――どうやら彼は、背中が弱いらしい。
みんなが笑う声にやっと我に返ったコーチは、彼の右肩をぽんぽんと叩く。
「おまえがそういうことを言うの、初めて聞いたよ。――一本目は踏みこみが甘かったのと、前傾姿勢が足りていなかった。二本目はもっと思いきって行け！」
「はい！」
彼の返事を待っていたかのように、頭上のスピーカーからアナウンスの声がする。
『それではこれより、二本目の競技を始めます――』
一本目の結果が芳しくなかった彼は、またしても最初のほうだ。
慌ててばたばた準備をする彼に、当然のようにわたしもついていく。
すると、
――まあ！　わたしに対抗しているの？
なぜか今度は、ゴッツ先輩もジャンプ台の上までついてきたんだ。
それにはさすがの彼も目を丸くして、
「……なんの真似っすか？　先輩」
「ひどい言い草だな、後輩」
「だって先輩の出番はずっとあとでしょうが」
もともと武志くんの次にうまかったゴッツ先輩は、今日もちゃんとその実力を発揮していたから、順番は後ろから二番目のはずだった。
「次、ビブナンバー三番の時枝選手！」
「あ、はいっ」
しかしそれ以上話をしている余裕はないようで、彼がゲートのほうに向かうと、ゴッツ先輩がその背中に声をかける。

「武志にかわりに見届けてやろうと思ってな」
「えっ？」
彼が驚いたように振り返ったら、ゴッツ先輩は親指を立てていた。
わたしの位置からは、「頑張れよ！」と強く願っている、ゴッツ先輩の心も見える。
――まったく、この人は！
ゴツくさえなければ、うっかり「俺の嫁」と言っていたかもしれない。
彼は頷きを返してから、スタートバーに腰をおろす。
（ああ――）
その背中に見えているのは、いつもとは違うと感じた一本目とも、また全然違う新しい感覚のようだった。
彼は、落ちついていた。
（恐怖心も罪悪感も、取り去られたのは一部だけ。残りはちゃんと、この胸のなかにあるから）
わずかに震えている手に、彼はそれを感じているんだ。
妙に力の入らない足に。
身体の内側から、強く叩いてくる心臓に。
（だからこそ、俺は飛べる）
興奮している気持ちが、強く伝わってくる。
どうして今まで、あんなにも冷めた心で飛べていたのかと。
そう考えてしまうほど、彼はわくわくしていた。
『続きまして、ビブナンバー三番・時枝大飛くん――』
かかったアナウンスに、さらに気を引きしめる彼。
わたしも準備をして、彼の心の片隅に、自分の心を預けた。
途端に聞こえてくる、彼の声。
（そう、俺は大飛だ）
思い切り飛んだら、一体どこまで行けるだろう？
その名に恥じないように。
武志に許してもらえるように。

風よ、どうか強く。
強く俺に吹きつけてくれ――！
彼の視界のなかで信号が青に変わり、カウントダウンが始まる。
彼は十秒ぎりぎりまで待っていた。
視界に風を感じるまで。
海が、呼んでくれるまで。
（……今だ！）
手を離すことに、腰をあげることに、もう迷いはなかった。
彼は吹きつける向かい風を切って、低い姿勢で突き進む。
味方は、重力。
最大限までスピードをつけたところで、助走路は下向きから横向きに変わり、味方だった重力に耐える力を要求される。
（でもこれを我慢すれば）
あとはもう、飛ぶだけだ！
強く。
今までのなによりも強く。
踏み切（サッ）りの練習でもやったことがないくらい強く、彼は踏みこんだ。
（――よーしっ！）
久々だったとはいえ、一本目をちゃんと飛べていたおかげもあって、踏み切りのタイミングはばっちりだったようだ。うまく風に乗ることもできて、これまで経験したことのない高さの景色に、思わず目を奪われる。
――すごいわ……！
わたしも一本目を一緒に飛んでいて、比べることのできる景色を知っているからこそ、高さの違いがよくわかった。
圧倒的に、空が近いんだ。
海も――本当に、飛んでいけそうなほど、近くに見えた。
輝いていた。
（俺はきっと、ずっとこの景色が見たかったんだ――）

わけもわからずそう感じる彼に、わたしの口もとも綻ぶ。
そして彼の脳裏に、くるくるとまわる向日葵が見えて、もっと嬉しくなった。
それくらいハイになっている彼。
わたしのしたことは無駄ではなかったと、今なら思える。
――でも感動してる暇はないわよ！
ジャンプは、飛んだだけでは意味がない。高く遠くに飛べば飛ぶほど、着地が難しくなる。それをうまく決めなければ、すべてが台無しなのだから。
（踏ん張れよ、俺の足！）
上空で姿勢を保っているだけでも充分に踏ん張っているというのに、彼は自分の身体に鞭を打つ。でも、これまで本気を出さずに散々サボらせてきたのだから、それくらい当然かもしれなかった。
続いて彼は、両手を広げバランスを取ると、着地に備える。その衝撃は、一本目の比ではないだろう。
わたしもそれを覚悟して、自分の身体が落ちるわけでもないのに奥歯を噛みしめた。
（俺の、テレマーク。俺が唯一、現時点で武志に勝っているもの）
彼の叫びが聞こえる。
（それを錆びつかせるわけにはいかないんだ！）
「……っ！！」
かなり大きな音を立てて着地は無事成功したけれど、まだ気を抜くわけにはいかない。両足を前後に広げ、その足が決してぶれないようにしながらブレーキングトラックに滑ってゆく。
（どうだ！？）
間違いなく、渾身のジャンプだった。
一本目とは比較にならないほどの歓声が、彼の耳をとおしてわたしにも聞こえてくる。
「K点越えたぞっ！」
「いや、それどころかヒルサイズに迫る勢いだぜ！？」

「この飛距離であんなにきれいなテレマーク決めるなんて……！」
口々に叫ぶ人の声も、聞こえた。
観客のほうがむしろ、彼よりも興奮しているように見えた。
「時枝！　よくやった、いいジャンプだったぞっ！」
名を呼ばれて彼が視線を向けたら、そこいたのはコーチだった。
（あ、そうか）
一本目のようにゴッツ先輩がそこにいないのは、わたしと同じ上にいるからだ。
そこでわたしは、彼のなかから自分の心を引きあげて、ゴッツ先輩のほうを盗み見た。
――あ……！
ゴッツ先輩は真剣な眼差しで、電光掲示板のほうを見やっていた。
そう、そこに飛距離と点数が表示されるからだ。
数分とたたずにパッと光がつくと、
「よっしゃあああっ！」
ゴッツ先輩はそう雄叫びをあげながら、誰よりも早くガッツポーズをつくった。
――ううん、あれは『ゴッツポーズ』だわ。
足がテレマークの体勢になっていたから、わたしはそう勝手に名づけたのだった。

＊

「一回目からそういうジャンプをすればよかったのに」
そう言われる覚悟をしていた彼を、わたしは知っている。
でも結局誰もそんなことを言わなかったのは、この一ヶ月間彼が充分に苦しんできたことを、みんな知っているからなんだろう。
彼を責めるどころか盛大に褒めて、残るふたりをみんなで一生懸命応援した。
――皮肉だよね。

彼らは、部内でいちばん飛べていた武志くんを欠いたことによって初めて、ひとつになれたんだ。知らず知らずのうちに、頼り切っていたから。
（俺だけじゃない。みんなも、コーチだってそうだ）
だけどそれに気づいてしまった今は、みんな「勝ちたい」という気持ちをますます強くしていた。ちゃんと自分たちの足で立っていること、飛んでいることを示すために。
そしてその想いは、空を舞う仲間にもちゃんと伝わる。ゴッツ先輩とその下僕は、一本目よりもさらに飛距離を伸ばす大健闘で、かなりのポイントを稼いだのだった。
――スキージャンプにそれほど詳しくないわたしでも、圧巻のジャンプだったわ！
すでに枯れているわたしの向日葵も、それでも機嫌良くくるりとまわる。
「くそっ、時枝の飛距離には全然届かなかったなあ」
飛びおえて戻ってきたゴッツ先輩が、悔しそうに告げた。
すかさず彼は、心のなかでフォローを入れる。
（ジャンプは二本の合計点で争うんだから、安定したジャンプを二回できるほうがすごいと思うけどな）
それでも彼がそれを口に出さなかったのは、絶対に怒られるとわかっていたからだ。
やがて、二本目最後の選手が飛びおわり、最終結果が電光掲示板に表示される。
ざわついていた空間が一瞬静まり、そしてさらに次の瞬間には、みんな跳びあがっていた。
――やった……！　本当に優勝しちゃった！！
もちろんわたしも、ひとりでぴょんぴょんと跳んでいた。
「ほんとに逆転しちまった……」
「すげぇ、俺たち超すげぇ！！」
「これで武志がいたら全国でも充分戦えるんじゃね！？」

途端に浮き足だったみんなは、
『間もなく表彰式を行いますので、選手のみなさんは表彰台までお集まりください』
というアナウンスの声に誘われて、さっさと移動を開始する。
それでもなぜか彼だけは、移動せずにきょろきょろとあたりを見まわしていた。
――あ、わたしを捜してる。
背中を見てそれがわかったから、わたしはそろそろと木陰から出ていった。
「お疲れさま」
照れを隠して声をかけると、こちらを見た彼の表情が一瞬凍りつく。
「……ごめん」
そうして謝ってきたときには、彼の視線は枯れた向日葵に向いていた。
「どうして謝るの？」
わたしは本当に不思議に思ったんだ。だって、こうなることは最初からわかっていたことだから。
すると彼は困ったように眉尻をさげて、鼻の頭を掻いた。
「え、と……その、まだかわりの向日葵が見つかってない、から」
それはきっと取り繕った言葉だったんだろうけれど、背中を見ていないわたしには、彼の本音はわからない。
「今大会が終わったばかりなんだから、仕方ないわ。もうちょっと待ってあげる」
「お、ありが――　！」
パァっと表情を明るくした彼は、言葉を途中で切ると、なぜか深く頭をさげてきた。
――えっ？
さすがのわたしも戸惑って、「なに？」と素の反応を返してしまう。

頭を戻した彼の顔には、少しの呆れが浮かんでいた。
「なにって、礼だよ礼！　おまえのおかげで俺、ちゃんと飛べたんだ。学校も優勝できたし、本当に感謝してる。邪険にして悪かったよ、ありがとう！」
彼だって本当は、枯れた向日葵を前に笑顔を見せたくはなかったんだろう。我慢しているのは気配でわかった。けれど、口もとはどうしても隠しくれなかったようで、満足そうに微笑んでいる。
――ああ、見つかった。
その笑顔に、わたしの向日葵は反応する。貪欲に、人の本質を見つづける向日葵は。
茶色く枯れていたその身を、ゆっくりと戻して――再び、咲いた。
「えっ？　……えええっ！？」
大きな声をあげたのは、当然彼だ。何度もまばたきをして、たった今目の前で起こった出来事を、確認しようとしている。
わたしも手もとの向日葵を、黄色く美しい大輪の花を取り戻した向日葵を見つめた。
「向日葵が、笑ったわ」
呟いたら、彼が不思議そうな言葉を返してくる。
「……『笑った』？　『咲いた』んじゃなくて？」
いつものようにくるりと茎をまわしたわたしは、キスをするように花びらを口に当てた。
「向日葵は、人の世界なの。これから生まれるたくさんの命を、今を生きる人々が囲み守っている。だから人と同じ。笑えば笑い、そしてよみがえる」
「……っ！」
大きく目を見開いた彼から、瞳を逸らさない。
――わかってくれた？
花びらのひとつひとつが、人の営みで。
中央で芽吹くときを待つ種たちが、これから生まれくる命で。
誰かが笑えば、その笑顔が伝播していくように。

答えは探すまでもなく、最初から自分のなかにある。
あるいは、自分のなかにしかない。
けれど黙っているだけでは、気づけないから。
きっかけが必要なんだ。
それは誰かの笑顔でもいい、涙でもいい。
大切なのは、ちゃんと受け入れること。
諦めないこと。
「……じゃあもしかして、俺に向日葵を探せって言ったのは」
「できそうにないことでも、やろうとする気持ちを見せてほしかったからよ」
それさえもできないなら、飛べるはずがないと、思ったから。
即答したら彼は、「やっぱり」という顔をした。
でも現実には、彼はわたしに助けを求める前に一度、自分の力だけで飛んでいるんだ。それはお世辞にもいいジャンプとは言えないものだったけれど、わたしの上を行ったことにはなる。
――本当は、強い人なのよ。
ただやさしすぎただけで。
二回目のジャンプで、わたしにはそれがよくわかったから、清々しい気持ちになれた。
「ありがとう、向日葵をもとに戻してくれて」
心からの気持ちを、言葉にして告げる。今度の笑顔は、もう隠さない。
すると彼は、焦ったように自分の前で両手をぶんぶんと振った。
「い、いや、俺のほうこそ……」
顔を赤らめたあとは、言葉が続かない。
――なにかしら？
わたしが疑問に思ったとき、遠くから彼を呼ぶ声がかかる。
「おーい時枝〜っ！　表彰式始まっちまうぞー！」
彼は「あ……」と小さく呟いてから、身体ごと振り返った。
「今行くー！」

彼がなかなか来ないから、心配に思った部員が様子を見に来たんだろう。でも一緒にいたのがわたしだったからか、その部員は声だけかけてそそくさと戻っていった。
わたしはそのあいだに、見えた彼の背中をチェックする。脅かさないようにそっと触れたら、それでも彼はびくりと震えた。
「よかった。魔方陣、ちゃんと直ってる」
呟いたわたしに、彼は頭だけ動かすとわたしのほうを見る。
「あのさぁ、なんで背中なの？　別に『見る』だけなら、前からでも見えそうな気がするんだけど……」
本質を突いてきたその問いに、わたしは目を細めて答えてあげた。
「前から見えるのは、建前ばかり。本音はいつも、心の後ろ側に隠されているのよ」
だからわたしは、後ろから人の心を見る。
前からでも見えないことはないけれど、本当のことはなにもわからないから。
――でも、本音だけで暮らせるほどみんな馬鹿じゃないって、わたしも知ってるよ。
ただ、建前だけで円滑に暮らせるほど、この世界が甘くないのも事実なんだ。
ときにはそれを出さなければ、彼を取り巻く人々のようにこじれてしまう。
わたしが呼ばれてしまう。
それは、最後の手段だから。
「じゃあわたし、そろそろ行くわね。優勝おめでとう――さようなら」
早く行かねばならない彼を気遣って、わたしは自分からくるりと背を向けた。もう彼の背中を、見る必要もない。
――大丈夫。今ならきっと、武志くんに笑顔を見せられるよ。
それを期待して、一歩一歩足を進める。
彼がわたしの背中を見ているのは、気配でわかった。でも彼には

わたしの心が見えないから、こんなにも嬉しい気持ちは伝わらないだろう。
――今だけ、見えるといいのにな。
願ったところで、叶うはずもない。
手もとの向日葵が、楽しそうに揺れるだけ。
やがて――
『それではただ今から、表彰式を行います――』
そんなアナウンスが聞こえてくると、後ろで「やばっ！？」と叫んだ彼の声が聞こえた。

人生のユニホームたるセーラー服に身を包んで、わたしは風に舞う雪のなかを歩く。
ずっと座って話をしていたものだから、身体がなまっていた。
そのせいか、身を攻撃するように吹きつけてくる雪の粒が、寒いけれど気持ちいい。
まるでわたしの心を、そのまま写し取っているみたいに。
――あ、電話だわ。
ピピピと鳴りはじめたケータイに気づいて、わたしは歩を進めながらポケットから取り出す。
『向日葵か？　首尾はどうだ』
声の主は、わたしの監督だった。わたしの能力にいち早く気づき、保護してくれた人。わたしに生きるための道しるべをくれた人。
「上々だよ。依頼人への報告は終わったから、これから帰還する」
『おや、武志くんのほうには確認に行かなくていいのかい？』
不思議そうに尋ねてくる監督は、わたしから逐一報告を受けているため、当然この物語の流れを知っている。
最初に「息子を飛ばせてくれ」と頼んできたのは、病気であることを隠している彼の父親。
そして原因の一端となっている武志くんの協力を得て、こうして解決することができたんだ。
――身体を抑えつけて、無理やり魔方陣を書き換えるのは簡単。
でもわたしは、それをしたくない。ちゃんと自分の意思で決めてほしかったから。そうしないと結局またもとに戻ってしまうから、面倒でもこんな方法を選んだ。
そしてそれは、きっと間違いではなかっただろう。
わたしは最後に見た彼の笑顔を思い出して、歩く足をとめた。
「大丈夫。彼は絶対武志くんのところに行くよ。そして笑うから」

【終】

笑顔が見たいと思っていた彼は、もう知っている。
相手の笑顔を引き出すためには、自分も笑顔にならなければならないということ。
人の世界は映し鏡。
それさえ知っていれば、これからも飛べるだろう。
電話の向こうで、監督の忍び笑いが聞こえた。
『おまえにそこまで言わせるなんて、すごいじゃないか』
「ええ。わたしが予想したよりも、ずっとすごい人だったよ」
わたしも、笑って返す。
手のなかの向日葵も笑って――わたしは再び、歩き出した。

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7908n/

向日葵と魔方陣

2010年10月8日12時13分発行